

力餅

島崎藤村

青空文庫

はしがき

わたしが皆さんのようなかたとおなじみになったのは、以前に三冊の少年の読本を書いた時からでした。わたしも皆さんにお話しするのを楽しみに思うものですから、こんど新規に一冊の読本を用意しました。

もともとわたしの童話は遠い国の旅から生まれてきたのです。わたしはそんな旅にいて、外国の少年や少女を見るにつけても、日本のほうにるすいする自分の子供らのことをよく思い出しました。長いおるすいもさみしかろうと思ひまして、何か外国のほう

で見たり聞いたりしたお話を書いて、それを子供らに送りたいたいと思つていました。遠い旅の空ではそれも思うように果たせませんでした。ぶじに日本へ帰つてきまして、自分の子供らに話しかける父のものがたりとして、遠い国のみやげばなしを書きました。それがわたしの『幼きものに』です。

早いものですね。それから、あの『ふるさと』を書いたのはもはや二十二年前、『おさなものがたり』を出したのは十八年前にもなりますよ。皆さんの中には、わたしの『ふるさと』や、『おさなものがたり』を読んでみてください。かたもありませんか。そしてわたしの子供らを覚えていてくださるかたもありましょうか。その子供らがもうみんなおとうさんになったり、おかあさん

になつたりしています。

ほんとに、月日のたつのは早いものですね。今に孫たちがわたしの童話を読んでみるような時もやって来ましょう。子に話しかけ、また孫に話しかけるといふことも、楽しいではありませんか。それは、さておき、今お話したように、そもそもわたしが童話を書こうと思ひ立つたのは遠く国から離れ、自分の子供からも離れている時でありましたが、それから少年のために物書くことの楽しみを知り、書いてみれば自分にも書けてうれしく思ひました。そんなわけで、ひとり自分の子供らに話しかけるばかりでなく、広く世の幼い人たちにも、またその親たちにも読んでみてもらおうという心を持つようになったのです。

わたしはまだ皆さんに聞かせるようなお話をいくらも書いていません。長いこの世の旅の間には、皆さんにお話ししたいと思わずかすの思い出があります。わたしはそういうお話を皆さんにするつもりで、今度あらたに一冊の小さな本を作ろうと思いい立ちました。それがこの『ちからもち力餅』です。

ちからもち力餅とはなんでしよう。

わたしがこんなことを言い出さなくても、皆さんは学校の先生に連れられながら修学旅行に行つて、どこかで力餅を食べたことがありますでしょう。力餅というものは大福だいふくに製して売るところもありませんが、多くはあんころに造つて、峠きそなぞを越す人の助けとします。わたしの生まれたところは信州木曾きそのような深い山の中

ですから、東京へ出るにはどうしても峠を越さねばなりません。そのわたしが兄たちに連れられて東京へ修業に出たのは十歳の少年のころでしたが、なかせんどう中仙道にはまだ汽車のない時分で、子供の足にも峠を三つも四つも越したことを覚えていきます。ばばがなく なりましたおりにも、葬式のため郷里くにへ帰りまして、その帰り道にわだとうげ和田峠というところを歩いて越し、しもすわ下諏訪のほうへ出たこともありました。あの峠は五里もあつて、遠く山と山との間にひらけた空のかなたにはあさま浅間のけむりのなびくのを望むようなところ です。あの山坂を越すのはなかなかほねがおれますから、旅人は いずれも峠の上の休み茶屋に足を休めて行きます。それからずつ と後になって、今度は自動車で和田峠を越したこともありまし

が、あの峠の上まで行くと、西餅屋にしもちやというのが一軒残って、そこで昔ながらの力餅を売っていました。

わたしたち一生の旅の間には、いくつかの峠も待っています。あんまりおなががすいていては、けわしい道よじのぼれるものでもありません。いささかの力餅が、そういう時のわたしたちを力づけてくれます。まあ、この小さな本は、わたしが皆さんのために用意した力餅で、ほんのこころざしばかりの贈り物なのです。

第一章 十の話

一 時計の言い草

皆さん、おいでなさい。お話ししましょう。まず時計の言い草から始めましょう。

学校生徒が先生から、「スピード時代」ということを教わって来ました。なるほど、先生の言われるように、今は「つばめ」のような早い汽車もあります。以前には船で四日も五日もかかるころを、わずか二時間か三時間で飛ぶような飛行機もあります。

これがスピード時代かと思えますと、学校生徒はおどろきまして、今にもつと早い汽車ができ、もつと早く飛ぶ飛行機のあるような時も来るのだろうか、そう思いました。おうちに帰って柱の古い時計を見ますと、時計は昼も夜も休みなしに、いつでも同じように動いているではありませんか。

「そんなスピード時代が来てごらん、お前はそれで間に合うのかい。」

と学校生徒が問いました。すると、古い時計はあいかわらずカチカチ音をさせながら答えて言うことには、

「そうみんな同じように動いたら、何も動かないように見えますよ。時計までスピード時代だなんて急ぎだしてごらんなさい。静

かに立っているものがあればこそ、ほかのものの速いかおそいかもはつきりわかりますよ。わたしはお前さんの生まれたころも、今も、同じように時をお知らせしています。わたしは急ぎもしなければ、休みもしません。わたしの針が急ぎすぎればあとへもどしますし、おそすぎれば前へ進めます。生徒さん、どんなスピード時代が来ても、時計はこれでいいと思いますよ。」

二 かわずの声

声を出すのは楽しいものであるのに、かわずなかまは土から出てきたばかりで、まだ歌一つうたえませんでした。みんなたんぼ

のわきや小川のほとりで低い小さな声で鳴いていました。

一ぴきのかわずが、ありまして、どうかしてもつと声を出したいと思いましたが、それが思うように出てきません。なかまのものは、と見回しますと、いずれも低い小さな声で鳴いていまして、中には穴を出たばかりのように、まだ土をしよつたままのかわずもありました。もつとも、これはかわずなかまにかぎりません。鳥ですらやぶのかげなぞにかくれていて、どつちを向いて見ても、声を出すものは少なく、ただただ冷たい風がヒユウ、ヒユウ、空をうなつて通るばかり。その吹き狂う北風の音をきくと、よけいにかわずはちいさくなつて、出したいと思う声までがのどのところへひからびついたようになりました。

やがていい陽気になりました。そうしましたら、それまでどこかにかくれひそんでいたうぐいすがまつさきに飛び出します。つづいてひばりが舞いあがります。遠い国のほうからはつばめがたくさんやって来ます。そこいらに遊んでいるすずめの群れまでがにわかにな元気づきました。

「いい声、いい声。」

かわずは鳥の鳴くのを聞いてみて、もうがまんしきれなくなりました。一雨ごとに水はぬるんでくるものですから、それまでちいさくなつてふるえていたかわずも生き返つたようになったのです。

まず声を出せ。そこでかわずも考えました。これは鳥なかまの

ほうへ行つて、声の出し方を覚えてくるにかぎる。そう思いつき
ましたから、いろいろな鳥のいるほうへ行つて、いい声で鳴くの
をよく聞いてみました。よくよくこのかわずもがまんがしきれな
くなつたからでしょう。それから水に帰つてきて、鳥から覚えて
きたとおりに自分でもそれをやってみました。なるほど、声は出
るには出るが、自分の声とも思われなような声でした。

「ホウ、ホケキヨ——ケキヨ。」

思わず、かわずは自分ながらふきだしたくなりました。それは
かわずにも似てもつかないうぐいすの口まねでしたから。でも、こ
のかわずはどうかして声を出したいと思ひまして、ひばりのよう
に「チ、チ、チ」とやってみたり、すずめのように「チュウ、チ

ユウ」とやってみたりすると、なおなお自分ながら腹をかかえてふきだしたくなります。遠い国から来たつばめが声の出し方はどうかと思つて、今度はあの口ばしの黄色い鳥のようにやってみましたら、これはしたり——まるで異人のまねごとでした。

しかし、熱心というものはえらいものです。その熱心が自分の声を出すことをこのかわずに教えました。かわずが鳥のまねをしていたのでは、どうしてもだめで、自分には自分の持つて生まれた声がある、そこへかわずも気がついたのです。

「グツグツ、グツグツ。」

まずその声からはじめました。

「ギヤア、ギヤア、ギヤア。」

そんな力のこもった声まで出せるようになりました。さあ、かわずはうれしくなりまして、これだ、これが自分の声だと思いますと、自分で自分の声にはげまされました。

「ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ。」

鳴けば鳴くほどかわずの声はずしくなつて行きました。そして、これまであの鳥なかまから声の出し方を見習おうとしたことも、自分にふにあいな物まねも、まんざらむだなほねおりでもなかつたと思うようになりました。このかわずが雑木林のすそのまわりを流れている小川のところで飛んで行つてみますと、そこに泣いている一ぴきの青がえるがありました。

「おや、お前さんはどうしましたか。どうしてそんなところに泣

いてるんですか。」

とこちらからかわずが尋ねました。

聞いてみると、その青がえるは親の言うことを聞かないで、親が川へ埋めてくれると言えは山と言うし、山へ葬^いけてくれると言えは川と言ったそうな。そんな親不孝なやつですけれど、親が死んだ時は、親の言うとおり山へ葬^いけてやりました。それで、雨でも降りそうになると、親の墓が流れる流れるって泣いているんだそうです。

この青がえるの話に、尋ねたほうのかわずもかわいそうになりました。いっしょに歌の一つもうたおうではないかと言いはげましました。それから二ひきのかわずがいっしょに声をそろえて鳴

きだしましたら、それまで低い小さな声しか出せなかったかわずなかままでがわれもわれもと声を合わせます。あつちでも「グツ、グツ」こつちでも「グツ、グツ。」——その声は遠くまでだんだんひろがって行きました、いつのまにか谷の中はかわずの声でいっぱいになりました。

三 くりの子供

くりの子供は三人の兄弟のように、同じ一つの青い「いが」の中に成長しました。この子供たちは、頭の先のちよんとどがったところから、小がらでふとったところまで、おたがいによく似て

いまして、どれが兄やら弟やらわからないほどでした。広い世の中にはふたごと言つて、いっしょに生まれてくる子供たちもありますが、これはふたごでなくて三つ子でした。それに、めずらしいほどの仲よしで、一つの「いが」のふところに押し合つて大きくなるうちに、まんやかに生まれた子供などは息も苦しいほど、ふたりの兄弟の間にはさまつて育ちましたが、それでも「だれが押していけません」と言つたことはなく、おたがいにかたく抱き合つて、親木の腕にぶらさがっていました。ちようど、そろつて成長するのを楽しみにする三人の仲のいい兄弟のように。

小屋に働いているおじいさんがこの子供たちを見に行くたびに、青い「いが」まで秋らしい色がついて、涼しい風にゆられていま

した。三人の子供も大きくなりました。おじいさんはよろこびまして、こう声をかけました。

「待て、待て。今におてんとうさまがお前たちをいいくりの子供にしてくださる。」

四　せみの送別会

せみの送別会。

いよいよせみも暗い土の中から出て行くこととなり、古いからをぬぎすてる時が来ましたので、土のもの一同よりより相談して、このせみのために送別会をもよおすことになりました。

世話ずきなむぐらもちや幹事を引き受けましたが、土に住むものばかりで、そう思うようにしたくもできません。なんでもありあわせの品で間に合わせることにしました。ごちそうはありの引いて来たもので間に合わせ、食卓のさらはむぐらもちがさがしてきたどんぐりの実のおわんで間に合わせました。そのために、この世話ずきな幹事はわざわざかしの木の下まで土を持ち上げに行つてきました。

一同が集まりましたところで、みみずが立つて、送別のあいさつを述べました。このみみずはからだをこごめたりのぼしたりするくせがあるので、その席に集まったものはみな笑いしましたが、しかし清い声で、言うこともはつきりとしていました。みみずに

言わせると、せみは同じ穴の中にばかり眠っていたように見えたが、今日になってみるとそれが長い長いしたくであつたことがわかりました。土に住むものは皆、古い穴にまんぞくしている中、からを破つて出て行こうと思ひ立つたせみの勇氣には感心します。この若者を青空のほうへ送り出すというは、土のもの一同の新しいうよろこびです。そうあいさつしました。

それから、余興に移りますと、水に住む音楽者たちがそこへ頼まれて来ていまして、なかまの合唱がありました。そのすずしい声にまじつて、びっくりするほど太い、しかし低い音で、調子をおん合わせるものもありました。

「ブーツ、ブ、

ブーツ、ブ。」

そんな声を出すのは食用がえるというやつでした。この食用がえるは普通のかわずより大きく、知らないものにはお化けとまちがえられたくらいの大がえるで、太鼓のような腹から、あの太い声が出るものですから、なかまの合唱に今日ではなくてならぬい歌い手のひとりとなっているのです。

さて、送別会もすんでみると、せみに別れを告げた土なかまにはいろいろなことを言うものが出てきました。

「あんなことでせみが飛べるかしらん。」
と言うのはねずみでした。

「せみはすこし思いあがっているのじやなかろうか。」

と言つてみるのはありでした。

「そんなら、わたしをごらんなさい、わたしは一度も古い着物などをぬいだことがない。陸にも、水にも、いっちようらですぜ。」
こうかわずは言つて、土の中から出て行くせみのうわさをしました。

たしかにねずみやありの言うように、せみの思い立っていることは冒険にそうありません。しかし、このせみはまだ若くて、光を求めずにはいられなかつたのです。そろそろ穴からはいだしで、思いきつて古いからをぬぎすてた時は、まだ高い声で鳴くことも知らず、木と木の間を飛び回ることもしりません。にわかには明るいところへ出て見ると、目もくらむばかり。新しく生まれた

ばかりのせみは、青いすきとおるような羽もまだ弱くて、ただただ静かにそこいらをはい回りました。

五 牛の先達せんだつ

朝に晩に、いい牛乳をお得意先のぼっちゃんやおじょうさんにごちそうするばかりでは、牛もつかれます。そこで小諸在こもろざいの小原こはらというところにかわれている牛は、ご主人の牛乳屋さんに連れられ、牛小屋を出て、烏帽子えぼしが岳たけのふもとにある牧場をさして骨休こせめに出かけました。

そこは信州ちいさがたごおり小こ郡郡の山奥にありまして、一回りすれば二

里もあるほど広々とした大牧場です。西の入いりの沢さわとなえる谷かげにおじいさんの牧夫が住んでいまして、牛をあずかつてくれます。ちようど小原の牛がご主人に連れられて行った時は、ほうぼうからその牧場へ骨休めに来ている牛なかまが五十頭もありました。

小原の牛乳屋さんは一冬ばかりも自分の牛をあずかしてもらいたいと言つてよくよく牛の世話を牧夫に頼んでおいて、やがて山をおりて行きました。その広い牧場では牛が勝手に遊べるように放しがいにしてありまして、好きな塩でもなめ、やなぎの葉をこいて食つて、谷川の水を飲みさえすれば、たいがいの病はなおるくらいの天然の保養場でした。しかしご主人に残された小原の牛

はしきりに家を恋しがりまして、二日ばかりはほかの牛なかまと遊ぼうともしません。

「ほら、ごちそうだよ。」

と牧夫が言いまして、番小屋のほうから持ってきた塩を石の上にもりに置いて行つてくれますが、小原の牛はわずかにそれをなめてみるばかり、ただただ住みなれた牛小屋のほうを恋しがっていました。そこいらには芝草がいっぱいはえています。飲むにいい水の流れもあります。小原の牛はアケビの実のむらさき色に熟した谷のほうへ行つて、そこにかくれ、角のかゆい時には山のつじの根なぞにこすりつけました。

二日ばかりするうちに、小原の牛もこの牧場に慣れてきました。

そろそろほかの牛なかまのほうへ近づいて行くようになりました。向こうの山の傾斜のほうには、寝たり起きたりして遊んでいる牛の群れも見えます。おじいさんの牧夫がなたやかまの類を入れた「山ねこ」というものを背中にしよいながら、西の入の沢から登ってくる時は、きつと塩のごちそうをしてくれるものですから、黒い小牛がまずそれを見つけて耳をふりながらやつてきます。額の広い目つきの愛らしい赤牛や、首の長いぶちなぞもそろそろやつてきて、頭をふったりしつぽをふったりしながら、塩のほうへ近づいてきます。そこへおなじみの薄い小原の牛でしょう。ほかの牛なかまはみな、「うさんくさいやつが来た」と言わないばかりに、すぐにはいっしょにごちそうにありつこうともしません。

いずれもそのまわりを遠巻きに巻いて、じりじり寄ってくるものばかりでした。

どうしてこんなにほかの牛なかまが用心ぶかくするかと言いますに、小原の牛は色も黒く、牝牛めうしながらにりっぱな体格で、どことなくやさしいうちにも威のある目つきをしていたからでした。

いったい、その牛なかまは、強い牛は強い牛と集まり、弱い牛は、弱い牛と組を立てているようですが、あらたに外からはいつてきた牛は、どんなにこちらで仲よくしたいと思いましたが、いきなりそのなかまには入れてくれません。それには「角押つのおし」ということをしなければならぬのです。そして、先が強ければ、どこまでもそのあとにしたがい、また、こちらが強ければ、向こ

うから付いてくるというのが、それが牛の性分に近いものなので
すから。

そこで、小原の牛もこの牧場へ来てから、めつきりつかれを忘
れ、進んでたくさんな牛の前へ出て行くほど元気づきました。そ
の体格を見たばかりでも、多くの牛はしりごみしていました。

「さあ角押しだ。お前から先へ出て行け。」

「いや、お前が出る。」

そんなことを言い合うものばかりで、なかなかラチがあきませ
ん。中には、「さあ、来い」と言わないばかりに小原の牛のほう
をめぐけて突進してくるものもありましたが、やがてまた引き返し
て行きました。

この牛の群れの中に、一ぴきの赤牛があらわれました。その赤牛は強いものどうし集まっていた中から出てきたので、見るからにたくましい様子の牝牛めうしでした。ゆつくりゆつくり小原の牛の前へやって来て角と角をがっちり組み合わせ、やがて全身の力をこめてたがいに押しつ押しされつしはじめたのです。

勝負はありました。とうとう、角押しは赤牛の負けとなりました。でも、小原の牛は勝ちほこる様子もなく、あいかわらずやさしい目つきをしながら牧場の内を見回していました。ただ、汗がその黒い毛をつたって、とめどもなく流れ落ちていましたとき。

牛なかまにも先達はありますね。

六 羊飼いの話

羊飼いは子供でも見に行くように、自分のかっている羊の群れを見に行きました。羊なかまから見れば、この羊飼いはみんなのおとうさんでした。

羊のたぐいにも、いろいろありますが、この羊飼いのかっているのは、綿めんよう羊というやつでして、厚い毛は綿のようにやわらかく、おまけにかわいらしい目つきをしています。その綿のような毛は織物に織られました、学校生徒の洋服にもなります。近ごろは洋服ばやりなものですから、ほうぼうの牧場で羊を飼うことはじめているのです。

その時、羊なかまは、小屋のまわりに遊んでばかりいてもおもしろくありませんから、どこかへ連れて行ってもらうように、羊飼いに頼みました。

「おとうさん、どうぞ。おとうさんどうぞ。」と言って、みんなでねだりました。

羊飼いは自分の子供のように思う羊の頼みでありますし、それにみんなよく言うことをきくものですから、そんならあすは遠足に連れて行きましよう、羊に約束しました。

遠足と聞いては、羊もうれしかったのです。いずれもあすを楽しみにして、小屋のなかにはいつて寝ました。

その翌日になりますと、羊飼いは約束どおり羊の群れを連れに

る学校にはいつて、ほかの人が二年で卒業するところを三年も四年もかかって、羊や豚の世話をすることを見習いました。動物の飼い方から、病気の時の世話のしかたまで、その学校で覚ええました。それから牧場へ雇われてきたのです。広い世の中には、もつと知恵があつて、それでもぶらぶら遊んでいる人もたくさんありますのに、神さまはこの知恵の足りない羊飼いに働く仕事をあたえてくださったのです。

「どうだ、いい遠足だろう。お前たちの好きな青い草もあるよ。広い野原もあるよ。」

と羊飼いは言いました、にこにこした顔をしながら、羊の群れを連れて行きました。このおとうさんの行くほうへは、羊なかまは

どこへでもついて行きました。畑があれば畑の間を通りました。谷があれば谷の間を越して行きました。

羊飼いは羊を喜ばせたいばかりに、さんざんいつしよに歩き回りました。そして、すこしくたぶれてきましたから、いいかげんに帰ろうとしますと、なかなか羊なかまが承知しません。

「おとうさん、もつと遠く、もつと遠く。」

羊がさいそくしました。めずらしい遠足で、羊は遠く遠く行きたがりました。行けば行くほど羊の好きなやわらかい草がありました。それを食い食い進んで行った時は、まるで遠足のおべんとうが行く先に羊を待っているようでした。

「おお、あそこにもおべんとう、ここにもおべんとう。」

と羊なかまは青々とした草のはえているところを見つけて、時のたつのを忘れていたのです。

そのうちに、日が暮れかかってきました。あんまり遠く来すぎてしまつて羊飼いは方角もよくわかりません。せつかく楽しい遠足に出かけて来たものの、このおとうさんは来た道を忘れてしまいました。そこいらは、だんだんうすぐらくなつてくるじゃありませんか。

「さて、これはこまつたことになつた。羊を連れて帰ることができない。」

と羊飼いは思いました。おてんとうさまは沈んで行くばかりです。道をたずねたいにも、通る人がありません。しまいには、羊飼いは

は石に腰をかけて、泣きだしたくなりました。

よくよくこのおとうさんもこまってしまったものですから、口笛を吹いてそこいらに遊んでいる羊の群れを呼び集めました。

「おい、わたちは、どうしたらいいんだろう。」

羊飼いのほうから羊に言いました。ところが、羊の群れはいっこう平気なもので、わけもなしにおもしろがりました。

「もう日が暮れてきたよ。お前たちの行くほうへ、わたしはついて行ってみるから。」

とまた羊飼いが言いました。

見ると、羊の群れは首をそろえ、来た時と同じようにみんないっしょにかたまつて、トツトと道を帰って行きます。しかたなし

に羊飼いのその後について行ってみました。羊の群れの動いて行くほうへは、羊飼いはどこまでもついて行きました。それよりほかに、このおとうさんにはいい知恵が出なかつたのです。

「おとうさん、おいで。早く、おいで。」

と羊の群れが呼ぶものですから、そのたびに羊飼いは力をつけられまして、畑があれば畑の間を通り、谷があれば谷の間を越して行きました。やれ、うれしや。羊はちゃんと道を知っていました。おかげで、羊飼いは牧場の小屋のところに帰り着き、その日の遠足を無事にすますことができました。

その時、羊飼いはうれしさのあまりに、いつしよに帰ってきた羊の頭をなでてやりました。それから、こう言いました。

「お前たちはどうして道を知っていたのかい。わたしより、お前たちのほうが、よっぽど知恵がある。」

七 かかし

かかしぐらいしんぼうのいいものもありません。雨にぬれようが、風にさらされようが、そんなことはいつこう平気で、明けても暮れても同じように田畑の見張りをしながら立っていました。

いたずらで、おしゃべりの好きなすずめたちがそこへやってきました。最初のうちはすずめも用心して、異様な形をしている番人には近づきませんでした。いつ来てもかかしは同じようにポツ

ンと立っているものですから、そのうちにはすずめも慣れて、からかいに来るようになりました。

一羽のすずめがこのかかしのかさの下をのぞきに行きました。それから、こうあいさつしました。

「はい、おとうさん、こんにちは。」

すずめはかかしをばかにしてかかったのです。しかし、かかしは返事もしません。そこへにわかには風が吹いてきましたら、かかしが今にも動きだしそうに見えるので、すずめたちはびっくりして、たがいにチュウ、チュウ呼びかわしながら、逃げるように飛んで行ってしまいました。もともとこのかかしはごくそまつな竹やわらでできたぶきようなものですが、人なみにみのを着、かさ

をかぶって、しんぼうよく見張りをしながら立っているおかげで、こんな田畑の番人の役がとまりました。

八 たんぽぽ

たんぽぽはふまれるほど花を多くつけるといいます。いじらしい草ではありませんか。ひどい霜が来ますと、根が浮いてしまつて、たんぽぽのような草でも、そうはつぼみを持てません。そこをふまれればふまれるほど、根がしまります。草には草の力がありませんね。

九 桃としようぶの節句

三月三日の節句の祝いの日に、女の子のある家々のありさまは、ひなの家とでも言ってみたいようなものです。かんむりをつけたおそろいの内裏びな、お庭にはたき火でもしていそうな仕丁しちよう、古風な五人ばやし、すべて遠い昔のさまをあらわして、山の上に都を定めたころのおごそかでみやびた音楽も聞えてくるような気がします。白酒、ひしもち、桃の花の掛け物、それに紅白の豆いり——その日を祝うものは、多く山のもですね。

「ごめんください。きようはおじょうさんのお節句で、おめでとうございます。わたしどもは山のものではありませんが、おなか

まに入れていただきこうと思ひまして、お祝いにあがりました。」
 こんなことを言つて、さざえやはまぐりが海からわざわざそこへ祝いにやつてきます。

それに比べると、五月五日の節句を祝うのが多く川や海のものであるのも、おもしろい。軒にふくしようぶ、ちまきに巻くまこもの葉、さわやかな五月の風にしつぽを振つて大空を泳いでいるようなのぼりのこい、あの長いひげをはやし、黒い衣装をつけて、魔よけの剣つるぎをふるっている鍾しようき馱たまでが、どうも山の人ではなくて、唐国からくにあたりから船で海を渡つてきた目の大きな人のように見えます。五月の節句に飾るものも三月とは大違ひで、鎗やり、刀、かぶよろい甲、胃、弓、矢、それから人形でもなんでも黒い腹掛けをかけた

力のある金時きんときのたぐいです。

「ごめんください。きようはぼっちゃんのお節句で、おめでとうございます。山のものもめずらしかろうと思ひまして、わたしどももお祝いにありがとうございました。」

と言つて、こんどは山からその日の祝いにやってきましたが、それがおいしいおいしいかしわもちです。

こんなすつきりとした気象と力のこもったしょうぶの節句が、みやびということを忘れない桃の節句とともに、一年に一度はかならずほうぼうの家へたずねて来て、あらゆる女の子や男の子のところへみやげを持って来てくれますよ。

毎年のことと言ひながら、どうかしてよい年を送りたいと思わ

ないものはありませんから、いろいろな祭の日が順にやってきま
すと、こないだは建国祭、次にはなんの記念日というたびに、ほ
うぼうの家では日の丸の旗を出すやら仕事を休むやらして、そう
いう日をよろこび迎えます。その中でも、三月と五月の節句の祝
いの日ほど、だれにも長いおなじみのものはありません。おとな
ですら、その日を迎えて一生に二度とは来ない少年の時をなつか
しみます。女の子にとっては桃の花のつぼみのような年ごろから、
男の子にとってはしょうぶの葉のような伸びゆくさかりの年ごろ
から、山のものを祝い、海のことを祝いで、新しいおべべに着
かえながら、そういう節句にめぐりあうというのも楽しいではあ
りませんか。

一〇 お寺の小僧さん

あるところに、お寺の小僧さんがありました。小僧さんがまだ十歳ばかりの少年のころ、そのお寺の和尚さんから思いがけない問を出されて、めんくらいました。

和尚さんがたずねて言うには、

「お前はどうしたら、わたしのよな住持になれると考えるか。」
住持とは、お寺を守り立てて行く坊さんのことをいいます。
和尚さんがそう言うものですから、小僧さんも子供心に考えまして、

「そりや、和尚さま、飯食^まつて寝て、飯食^まつて寝て、大きくなれば和尚さまのようになれます。」
と答えました。

その時、この答をきくと、和尚さんはいきなりむちを持つてきて小僧さんの頭をなぐりつけたそうです。

お寺は精^{しょうじや}舎^{いはいどう}というくらいのところですから、本堂でも庭でも位牌堂でも清潔にしておかねばなりません。それには住持の役をつとめるものがまずからだも心も清くないことには、つとまりません。そこでおシャカさまのような人をお手本にして、そのお手本に仕えるつもりで、毎朝早く起き、鐘もつけば、お経も読み、自分の修行を怠らないようにするのが、いい坊さんと言われ

る人たちです。どうして飯食^{まま}って寝て、飯食^{まま}って寝て、大きくなつたぐらいで、りっぱな和尚さんになれるようなものではありません。この小僧さんも十歳ばかりの年ごろに、一生忘れられないような力^{ちからもち}餅を味わつたおかげで、りっぱな人になつたと言いますよ。よくよく和尚さんのむちはこの小僧さんの身にこたえたのでしよう。そして、和尚さんからもらつた力でも、長い^{しょうが}生涯^いの間には、それを自分のものに変えることもできたのでしよう。力はふしぎなものですね。

第二章 母を思う

一 母を思う

少年の日に両親のひざもとを離れて、東京に出てから九年ばかりの間、わたしは一度も郷里くにに帰りませんでした。

父が郷里くにのほうでなくなったのは、わたしの十五歳の時でしたが、その時ですら東京にとどまりました。今になって言えば、他人のなかに出て修業することも身を立てるためであったとは言い

ながら、母がわたしのような小さなものをよく手ばなしたと思います。

わたしも物心づく年ごろには、吉村よしむらさんの家のお世話になっていまして、何一つ不自由しなかつたのも、まったく吉村のおじさんたちのおかげでしたが、一書生の身としては自分で自分のかじをとりながら進路をさだめるよりほかはなかつたのでした。それもおもかじだ、今度は取りかじだと、自分で自分に言ってみるよ
うなものでした。それまでただの一度でも郷里くにへ帰ろうなぞと思
ったことのないわたしでしたが、明治学院へはいつて、諸国から
学びに来ているほかの青年たちを見るにつけ、いろいろ思いあ
たることあつたのです。いつのまにか自分の性質が人にもまれて、

ひねくれたほうにばかり向かうように思われ、もつと素直に自分を伸ばしたいと気がついたからです。一年ばかりも学校を休んで、郷里くにのほうにいる母のそばに暮らしてみたい、そんなことを吉村のおじさんの前に言い出したこともありました。その時、おじさんから、お前もばかなやつだ、今が勉強ざかりのたいせつな時ではないかと言つて、笑われてしまいましたつけ。

二 かぶをつける家

いろいろのことを思い出したのも、その時でした。

わたしの郷里くには木曾きそのような山里でしたから、毎年かぶのとれ

るころになりますと、わたしの家でも母やあによめがたすきがけに手ぬぐいをかぶり、じいやだの下女だのを相手に赤い色のかぶをつけました。そうして野菜をたくわえることがわが家での年中行事の一つのようになっていました。ふるさとのほうのことという、家のものがつけ物小屋に集まっているありさまが胸に浮かんできました。わたしは、裏の井戸ばたのほうから洗いたてのかぶを運んでくる下女やじいやを思い出し、それを切り分けたりたるにいでて塩をふりかけたりする母たちを思い出しました。

三 古い池

少年の日のことも、それからそれとわたしの胸に浮かびました。竹馬に、ネツキ（木曾きそではシヨクノという）に、氷すべりに、手おけやたるのたがの古いのを応用した輪回しなぞに、山家やまがの子供らしい遊戯にはわたしも事を欠きませんでした。

わたしの古い家の裏は、じいやの働く木小屋や竹やぶに続き、一方は稲荷いなりのやしろに続いているようなところで、樹木も多く、近所の子供もよく遊びに来ました。そこに古池がありました、こけむした石がきの間からは雪の下が毎年のように花をたれました。ある日、となりの家の子とともに、わたしはその池のまわりを遊び回って、いかにもかわいらしく咲いている雪の下が目についたものですから、石がきづたいに花をとろうとして、アツと思うま

もなく古い池の中へすべり落ちました。その池はおとなの背せいがよ
うやく立つほどの深さがありましたから、兄がそこへかけてきて、
救い出してくれなかつたら、わたしはどうなつたか知れません。
あぶないところでした。

四 塩のおむすび

これも幼い時分のことでした。わたしの母はわが家の庭にある
ほおの木の葉をとって来まして、それに塩のおむすびを包んでよ
くわたしにくれました。これはなんでもないことのようにですが、
ほお葉は広く、おむすびが手につかなくて、子供心にもうれしか

ったのです。あのほお葉のにおいをかぎながら食べられる熱い塩のおむすびはわたしが好きなものの一つでした。

五 いもやきもち

前にもお話ししたように、わたしの郷里くには木曾きそのような山里でしたから、冬になると山家らしいもやきもちをつくって、それを毎朝の常食としました。いもやきもちはおもにそば粉を用い、里いもの子をまぜ、大きくにぎりまして、炉の火で焼きました。いろいろのまんなかには大きなべが掛かっています。そのまわりには鉄の渡しが置いてあります。うちじゅうのものはいろいろばた

に集まりまして、鉄の渡しの上に並べたのがこんがりといい色に焼けるのを待つのです。あの新そばのにおいのする焼きたてのいもやきもちに大根おろしを添えて食べるのもまた、わたしが好きなものの一つでした。

これらはみな、山家らしい暮し方から来ていることでした。そういうわたしの家では藍、^{あゐ}塩、お砂糖、そのほか紙なぞのぜひとも入用な品をよそから買うだけで、たいがいの物は家で手造りにしました。お茶も家で造りましたし、糸も家で染めました。わたしの着る物は羽織でも帯でも母の織ってくれたもの、わたしのはくぞうりはじいやの造ってくれたものでした。そういう家にわたしも生まれたものですから、子供の時分から物を手造りにするこ

との楽しみを覚ええました。

六 髪ゆいの親子

数衛^{かずえ}という髪ゆい親子のことは、わたしの『ふるさと』の中にも書いておきましたが、わたしにとつては忘れられない人たちです。すから、重複をいとわずここにも書きつけてみたいと思います。

わたしの家に生まれたものには乳母^{うぼ}を一人ずつつけて養うならわしになっていましたから、両親がわたしのために乳母として雇い入れてくれたのはお雛^{ひな}という女でした。わたしはお雛のせなかについてその鼻歌をきいたり、眠くなればそのせなかに寝たりして、

だんだん大きくなつて行つたようなものです。このお雛の父親の名が数衛で、村でもきたないので評判な髪ゆいでした。昔は男でも髪をゆいましたから、わたしの少年のころにはまだ数衛のような髪ゆいがあつたのです。数衛は油じみた髪ゆいの道具をさげはよくわが家へかよつてきまして、父がまだ散髪にならない時分はその髪をゆつたり、そのヒゲをそつたりしたことを覚えています。そんなきたない髪ゆいの子に育てられたと言つて、わたしは村の人たちから、からかわれました。「やあ、数衛の子」などと言つてよくからかわれたものです。

このわたしが兄たちに連れられて郷里くにを出る時、ちいさい時分から自分を抱いたりおぶつたりしてくれとお雛の家へも、もう遊

びに行かれないかと思ひまして、お別れを告げるつもりもなく遊びに行く気になりました。わたしはそつと家を抜け、お雛の家をさして歩いてまいりました。村の裏側づたいに、お墓参りに行く道のほうから、なるべく知つた人に会わない竹やぶのわきのたんぼ中の細い道なぞを通りまして、こつそりとかくれるようにして出かけて行きました。というのは、お雛の家へ遊びに行くところをだれかに見つけられたら、また人にからかわれると思うからでした。

数衛の家は村の中でもずっと坂の下のほうで、水車小屋に近いところにありました。一すじの水の流れが音を立てて家の前の石がきの間に走ってきているようなところです。

ちようど数衛は家にいる時で、わたしが遊びに行きましたら、よく来てくれたと言って、たいそうよろこびました。例の油じみた髪ゆいの道具などが置いてある炉ばたで、わたしのためになべで菜飯をたいてくれました。わたしがなすが好きだからと言って、皮のまま輪切りにしたやつをみそしるにしてくれました。その貧しい炉ばたで味わったそまっなお別れの食事は、わたしにとって一生忘れられないものです。

それからわたしは東京に出て、なすの季節というとき数衛のつくつてくれたみそしるをよく思い出しました。二度とわたしはあの味に比べられるものにはありません。

七 不似合いなもの

およそ不似合いなもの、わたしの郷里の人、末木兵次郎さんひょうじろうのあだ名。うそが多くてずるく立ち回ることを、わたしの郷里のほうではごまをすと言いますが、だれのいたずらからか、この兵次郎さんには「ごま兵さんひょう」というあだ名がついていました。そのくせ、兵次郎さんは村での正直者でした。おそらく、兵次郎さんは、そんないやなあだ名をつけられていても気にするような人ではなく、「ごま兵、ごま兵」と呼ばれれば呼ばれるほど、ますますそのない人になって行ったのでしよう。

八 なんと申すか、ならぬと申すか

わたしの生まれた村はかきの木の里です。そろそろ梅の花のおつてくる節分の日、わたしのいなかではかきの木を打つということをやります。二人の男がかきの木の下へ行きます。一人は手にした棒で木の幹をぶんなぐりながら、

「なると申すか、ならぬと申すか。」

と言って責めます。その時、もう一人のほうがかきの木にかわつて、

「なりません、なりません。」

と答えるのです。強く打たれれば打たれるほど、その年のかきの

みのりがいいとは、幼い時分に村の人から話しきかされたことでした。ふるさとなつかしいわたしの胸には、こんな古いならわしまでが浮かんできました。

九 恵那山のふもと

長野県、西筑摩郡、神坂村——そこが母たちの住んでいたところでした。村はずれの新茶屋に芭蕉翁の句塚がありまして、信濃と美濃の国境にあたることを旅人に教えるところでした。道ばたの畑の間には赤みがかつたむらさき色の桑の実が熟し、秋風の吹くころには山ぐりの落ちる木曾路の入口にあたるところで

す。

えなさん
恵那山は村から近く望まれる山です。今でこそ、木曾も昔の木曾ではなく、中央線の鉄道が敷かれるころから谷あいも開けてずつと明るくなりましたが、わたしが子供の時分にはもつと樹木は深く、昼でも暗いくらいのところがありました。少年のわたしはわが家のじいやに連れられ、村から小一里ばかり山道を歩いて、そこに祭つてある山の神の小さなほこらの前へおもちをそなえに行つたことを覚えています。

まあそんな山里ですが、信濃の国の中でも一番西のはずれにあたる峠の上の位置にあるものですから、一方にながめがひらけていまして、美濃の平野の空を望むこともできるようなところです。

お天氣のいい日には遠くかすかに近江おうみの伊吹山いぶきやままで見えるとい
 います。わたしはあの恵那山のふもとの村に母を置いて考えるこ
 とを何よりの心のよろこびとし、いつまでも母がたつしやで、ふ
 るさとの人たちを相手に働いてくれるようにと、それのみを願っ
 ていました。

一〇 里ことば

ふるさとのお話につけ、木會きそという地名の意味をここに書きつ
 けましょう。會そとは麻のことです。麻の皮をはいだのを木會きそ、畑
 から切つて来たのを生會なまそ、日に乾ほしたのを乾し會そ、花ばかりなの

を男會おそ、実のなるのを女會めそ、男會の中でも長くて大きいのを重會おもそなぞと言います。これは里ことば——すなわち、地方のことばですが、木曾の木とは、生糸きいとの生き、生そばきの生きと同じで、生きのままの麻のことを言った古いことばであろうということです。

木曾の麻衣あさぎぬとて、わたしの郷里では古くから麻を植え、布を織り、産業としましたから、やがてそれが土地の名ともなったのでしたろう。

一一 白い犬の話

恵那山えなさんの裏山つづきに御坂峠みさかとうげというところがあります。木曾きそ

の御坂とはその峠のことです。

山と山との連なりつづいた間に古い道の残っているとところで、わたしの村の裏側からよく見えます。御坂越えといひまして、ずっと昔の旅人は尾根づたいにそんな高い峠を越したのです。

古い歴史の物語に、あの日やまとたけるのみこと本武尊が地方平定の重い任務

を帯びたもうた時、ご一行は二隊にわかれました、鑑察の役目をうけたまわりましたきびたけひこ吉備武彦はえちご越後へむかい、尊は道を分けてし信濃なのに進み入られたとしてあります。そのお帰り道に、尊のお通りになったのが木曾の御坂でした。

なんにしても、わたしたちの山国は谷多く、林も深く、がけにはくまざさおい茂り新しい道ができて樹木や岩石の切り開かれな

い時分には山ひる、ぶよ、そのほか無数のやぶ蚊なぞになやまされたくらいのところでは、大昔の山越しはどんなでしたろう。人はつえにすがつても登りがたく、馬はくつわをかみしめても進みかねたということでは。

古い言い伝えによりますと、尊は大きな山を越して峰まで行き着きたもうころには、ひもじくなられた。そこで山の中で食事をしたもうた。そこへ山の神が尊を苦しめようとして白いしかの姿となり、尊の前に立ちあらわれました。そうです、白いしかです。あやしく思われたものですから、尊はすぐにんにくの「つぶて」を投げつけられたところ、それが目にあたつてあやしい鹿を殺しました。その時です、尊は道を見失いまして、出るところがおわ

かりになりません。さいわいにも、一匹の白い犬は道を知つていて、尊を導き顔に見えたものですから、そのあとについて行くうちにやつとのことで美濃みのの国のほうへ出られたということです。

後の世のものはこのお道すじを考えまして、おそらく尊は伊那いなの谷のほうから御坂峠にかかられ、それから霧きりが原はらの高原へと出られたことであつたらうと申します。また、あの日本武尊のご一行が越後を出た吉備武彦に会いたもうたのは、今の湯舟沢ゆぶねさわから、なかつがわ中津川、あるいは大井あたりまでの間かとも申します。というのは、越後、越えつちゆう中、飛驒ひだの国あたりから信濃の国へかけて、また西は木曾川のある美濃の国の苗木なえぎまでの道すじはずっと大昔からの道というからであります。

一一一 母の上京

三人あつたわたしの兄弟は思い思いに郷里くにを離れるようになり、その中でも一番上の兄は東京へ来て吉村よしむらさんが家の近くに宿屋住まいをするようになったものですから、母もわたしたち兄弟のものを見に用事かたがたちよつと上京したことがありました。

女のひとり旅といいますが、めつたに郷里くにを出たことのない母としては、めずらしくもありまた心配な旅でもあつたのでしよう。そのころは今とちがいで、中央線の鉄道もまだできていませんし、名古屋回りで上京するにしても、木曾の西のはずれから

東海道へ出るまでは人力車よりほかの乗り物もなかったからでした。母は峠のお頭かしらに名古屋まで見送られ、それから汽車で上京しました。当時はまだ東京駅もなく、新橋の旧停車場が東海道線の入口でした。そこでわたしは兄とともにあの停車場へ迎えに行きました。母は九年もわたしを見ないものですから、自分で自分の目をうたがったくらいであつたそうです。それに都会の停車場の夜の混雑に気を取られて、わたしといっしょに二人乗りの人力車に乗ってからも、これが子供の時分に別れたわが子かと、まだ母はそう思つたくらいであつたそうです。

「おかあさん。」

とわたしが車の上で呼びかけた声を聞いて、今さらのように母は

心におどろいたということでした。

久しぶりで会うことのできた母はだいぶ年としては見えましたが、しかしまだまだ元気でした。寒い地方の人らしく黒いトンビなぞを着てきまして、国を出る朝はそこいらはもう霜でまっ白、そんな話がありました。つやつやとしてりんごのように赤いそのほつぺたも変らずにありました。

この母は、わたしが長いことお世話になった礼を言い、吉村さんの家へもたずねて来まして、このご恩を忘れてはならないと言つて、それをおじさんたちにも話し、わたしにも話しました。七八年前のわたしはまだはなをたらししていた少年であつた、そんな話がおじさんの口から出たのも、その時でした。

吉村のおばさんもおもしろい人です。母が帰ったあとになって、こんなことをわたしに言いました。

「お前さんのように、そんなにえんりよしているやつがあるものかね。もつとおかあさんの首っ玉にかじりついてやればいいのに。」

第三章 二つの雷さまその他

一 二つの雷さま

少年期から青年期のころにかけて、わたしは「かみなり」とあだ名のついた人を二人ほど知るようになりました。

一つの雷さまはもういい年のおばあさんでした。このおばあさんは名をおしんといい、若いさかりのころに木曾福島の代官山村きさてふくしまさまのお屋敷勤めに出て、その時についたあだ名が雷でありまし

たとか。「おしんさんの雷」と言えば、御殿勤めするほうばいの女中たちから恐れられもし、敬われもしたらしい。そんなあだ名を取るくらいの人ですから、後には東京に出て暮らすようになりましてからも、養子を助けてよく働いたけなげな気象きしょうの婦人でありました。この人が吉村よしむらのおばあさんです。

わたしが上京後、お世話になりましたのも、おもにこのおばあさんたちのもとでした。吉村のおじさんは書生を愛する心の深い人でしたし、それに郷里くにが同じだものですから、わたしのようなものまで家族同様に思つて世話をしてくだすつたのです。わたしはまだ京橋区数寄屋河岸すきやがしの泰明たいめい小学校へ通うほどの少年でしたが、冬にでもなりますと、寒さのために手や足がはれまして、

「おばあさん、しもやけが痛い。」

そんなことを言つて泣くたびに、夜中でも起きてふとんの上からわたしの痛む手足をたたいてくれたのも、このおばあさんでした。吉村さんの家では、その親類すじにあたる漢学者、武居用たけいようせ拙つ先生の総領むすことという人のうわさがよく出ました。その漢学者のむすこさんは年若でなくなつたそうですが、惜しまれた人のようです。その人のうわさをわたしにして聞かせて、学問にはげむ心を起させたのも、またこのおばあさんでした。

なんと、皆さん、吉村のおばあさんの雷さまは、八十幾歳の老年になつても、まだ遠くのほうでゴロゴロ鳴っていましたよ。おばあさんがその年ごろには、養子にあたる吉村のおじさんもなく

なり、実の娘のおばさんも先になくなりました。おばあさんから言えば孫にあたる今の吉村さんの代になっていましたが、まだそれでもおばあさんだけはたっしやでいました。吉村さんも心がけのいい人ですから、両親のためにいいお墓を造ってあげようと思ひまして、長いことかかって思うとおりなものを建てました。ところが、それができあがってみると、おばあさんの言うことにはそのお墓があまり大きすぎるから自分には気に入らない、自分などはもつと小さなお墓へはいりたい、そう言っておこつたそうです。吉村さんは近ごろになってそのことを思い出したと言つて、手紙でわたしのところへ書いてよこしました。そんなところにも、なんとなくばばの人がらが現われていると思ひますと、吉村さん

の手紙にありました。おばあさんの雷さまは一生の最後まで光っていました。おばあさんはそういう人でした。

もう一つの雷さまはわたしが青年時代に知った同い年の学校友だちです。松浦和平君という青年です。松浦君も、わたしも、十六歳から二十歳へかけての年ごろを白^{しろかね}金の明治学院に送ったなかまです。

「松浦の雷は、どこへ落ちるかもしれない。」

そんなことを学校の友だち仲間によく言ったものでした。そんながらがらした気象の人でしたが、物に「きまり」のいいところがあつて、わたしもひどく感心したことがあります。

わたしたちが学校の寄宿舎では、夜の自修時間がすむころから、

話の合うものどうしたがいに集まりまして、おそくまで青年らしいむだばなしによくふけりました。どうかすると、寝部屋にまで話しこみに来るものがあります。そこへ体操の教師を兼ねていた舎監しゃかんが見回りに来て、やがてその舎監のくつおとが寄宿舎の廊下に消えるころになつても、まだ話しこんでいるものがあります。あるものは寝台に腰かけ、あるものは窓ぎわによりかかつて、というふうでした。そんなに皆がよもやまの話にむちゆうになつてゐる時でも、松浦君ばかりは自分で眠ろうと思ふ時が来れば、さつさと寝台の上に横になりました。どんなおもしろそうな話や笑い声がまくらもとに起ろうとも、君はいつこう平気なもので、やがてひとり高いびきでした。これはちよつとほかのものにできな

いことでしたが、君にはそういう「きまり」のいいところがありました。君の雷さまは、いつでも自分でこうと信ずるところから鳴り出すようでした。声の太いことも学校じゅうで評判でしたこの松浦君、明治学院を卒業してから米国に留学して、かの地の大学で工科を修め、自らハンマーを手にして機械の扱い方をも実地に研究して帰りました。後には東京浅草の蔵くらまえ前にあつた高等工業学校の先生にまで進んだ人です。

二 この世の旅のはじめに

この世の旅のはじめに、わたしはいくたりかの年とつた人に会

いました。

その中にはもう髪おきなの白い翁のような人もありました。わたしはまだ一足踏み出したばかりで、年は若し、経験というものも少なかったのです。そんな年ごろに、思いがけなく会うことのできた人たちです。どれ、その中から二三の年とつた人のことについて皆さんにお話ししましょう。もつとも、わたしの会つた老人は、そう物を教えたがらないほうの人たちでしたが、それでいて教えられることはかずかずありました。

三 近江の刀鍛冶

近江おうみの刀鍛冶かたなかじ、堀井来助ほりいらいすけ老人は、刀鍛冶かたなかじのほうの名前を胤た
ねよし吉よしといいました。二十五歳の若さで近江の膳所藩ぜぜのお抱えかかにな
 ったほどの腕ききでしたが、明治の世の中になりましたから一時
 刀の道もすたれたものですから、琵琶湖びわこのほとりの鳥居川村とりいがむらと
 いうところにかくれて百姓のくわやかまなどを打っていました。
 どうしてわたしがこんな刀鍛冶を知るようになりましたか、ま
 ずそのことからお話ししましょう。

まだ年若なころに、わたしも諸国の旅に出たことがあります。
 今のように乗り物もそう便利な時世ではなく、汽車で行かれない
 ところはわらじがけで、毎日七里ぐらいの道を歩きました。その
 うちに、だいぶくたぶれてきたものですから、しばらく石山の茶ち

やじょう

丈やじょう ということころを借り旅の足を休めました。そのへんのこと
をすこしお話ししてみれば、近江の石山は古い歴史のあるところ
でして、こくふやま 国分山をうしろにし、湖水のながめも前にひらけてい
まして、大きながんせき 巖石の間に名高いお寺が建ててあるのです。茶
丈とは、このお寺の門前にありまして、以前にはさんけい 参詣に集まっ
て来る諸国の人たちのためお茶の接待をしたところだそうです。が、
わたしが行った時分はもうお茶の接待もすたれて、ただ大きな古
い茶がまだけが残っていました。

茶丈の亭ていしゆ 主は天津のほうへ通かよつて働いている大工、そのむす
こは天津のげた屋へ奉公している若者で、おかみさんと娘とがる
すいかたがた古い茶がまのわきでほたるのかごを張るのを毎日の

内職にしていました。石山はほたるの名所ですから、まだ人の出さからないうちから、おかみさんたちはそのみやげもののでしたくをいそいでいたのでしょう。

まあ、わたしが借りて自炊をしたのは、そんな茶丈の奥の部屋でしたよ。そこにわたしは四月の末から、やがて梅の実のなるころまでいました。石山のお寺へあげるものだと言つて、茶丈の亭ていいしゅ主が庭に植えておく草花の咲きだすのもそこでしましたし、村の子供が青梅を落として来るのもそこでした。わたしは庭づたいに湖水のほとりに出て、向こうにかかるにじのような瀬多せたの長い橋を望むこともできました。時には茶丈のむすこが天津から帰つて来ていますと、月のある晩などいっしよに湖水へ小舟を浮かべ、二

人であちこちとこぎまわりました。そんな時に舟の上で笛を吹いてわたしに聞かせるのもこのむすこでした。

ふとしたことから、刀鍛冶来助老人のうわさがこの若者の口から出ました。というのは、来助老人はそのおじさんにあたるからでありました。わたしが初めてあの刀鍛冶を知るようになったのも、その時からです。聞いてみますと、来助老人はまことの刀鍛冶らしい人で、そんな人が湖水のほとりにかくれているのもゆかしく思われ、どうかしてわたしはその人に会ってみたいと思うようになりました。

当時は刀鍛冶で妻子を養つまごうこともできないような時であったといえます。それで妻子を養おうとするには、どうしても古刀の

「にせもの」を作るよりほかにその日の暮らしようがありません。当時、はぶりのいい刀鍛冶という刀鍛冶はみな、そういう「にせもの」を作って売っていたといえます。来助老人はそれほど刀の道のすたれたのを悲しみまして、草ぶかいいなかに引きこむ気にもなつたのでしよう。刀鍛冶としてその道に一生をささげるためには、妻をも持つまい、子を持つまいという、そんな決心にも至つたのでしよう。百姓のくわやかまを打ちながら、三十年もじつとしんぼうしているようなこともそこからはじまつてきたのでしよう。聞けば聞くほど、わたしもたずねて行つてみたくなつたものですから、そのことを茶丈のむすこに話したところそんならいっしょに行つてあげましようと言つて、こころよく引き受けてく

れたのです。

そこで出かけました。

石山から鳥居川村までは八町ほどです。たずねて行ってみますと、ささやかな店座敷みせざしきにはうわさにきいた鎌かまの類がならべてあります。土間のところにはふいごなどの道具が置いてあります。暑い日ではありましたが、古びたじゅばん一枚で裏口の木戸のほうから出て来た六十歳あまりの隠居さんがありました。この人が来助老人でした。この世の雨や風にもまれて来たようなその額つきを見たばかりでも、ただの鍛冶屋の隠居さんでないことがわかります。

老人はわたしののような年のちがったものをもよろこんで迎えて

くれ、いろいろな話をしてくれました。刀剣のことを書いた本などをも出して見せてくれました。その中には古刀と新刀の歴史が図でわかるように説き明かしてありましたが、それぞれの流儀のちがいと言いますか、図にあらわれた焼き刃の模様がちょうど海の岸に寄せてはかえる潮の花の紋のように見えました。焼き刃の模様ほど刀鍛冶の気質をよくあらわすものもありません。あるものはすなおに、あるものはするどく、あるものは花やかにというふうに。

その時、こんな話も出ました。刀というものは五百年も六百年もの間に名高い刀鍛冶が出て鍛え方をきわめつくしてありますから、いくら後の代のちのよものが工夫をこらしたつもりでも、どこかで

昔の人にぶつかります。まったく昔の人の考えておかない新しい意匠で、これが自分のものだと言えるような刀が、なかなか打てるものではありません、とき。

それから、来助老人は自作の刀を取り出してきまして、

「まあ、自分の打った刀は、見たところはそうよくありませんが、人は切れるつもりです。」

そんなことを半分ひとりごとのようにしながら、白鞆しらさやをぬいて見せました。においと言つていいか、ひびきと言つていいか、わたしにはその刀を形容することもできませんが、見ているうちにこちらの心が澄んでくるような作で、ことに力をこめて鍛えてあるその刀の重さにはおどろかされました。来助老人はその年に

なつても、物を学ぶ心の衰えない人とみえ、刀鍛冶とは言いながら『輿地志略』^{よちしりやく}のような地理書をそばに置いて、世界のことを知ろうとしているところもありました。老年になつてもこんな人もあるかと、そうわたしは思いました。

それから後の日に、まだ石山に逗留^{とまりゆう}していたころ、一度茶丈のほうで来助老人を待ち受けたことがあります。老人がたずねて来てくれるというものですから、わたしはいっしょにそまつな食事をするつもりで、わざわざ瀬多のほうまで湖水名物のこいなどを買いに出かけ、それを自分で料理しました。ところが、こいの胆^いを取ることを忘れたのです。さて、老人をお客にして、いっしょにはしをつけてみると、わたしの煮たこいは苦くて、大笑い

したこともありました。

その時、老人は日ごろ書きためた自作の和歌や発句ほつくを持ってきてわたしに見せてくれました。じょうずとは言えないまでも、正直に思いをのべたものでした。おそらく、百姓を相手としての長い鳥居川村のいなか暮らしが、そんな和歌ともなり、発句ともなったのでしよう。わたしはまたこの来助老人が筆持つ腕に重い石をしばりつけるほどにして書道のほうにも工夫を積んだ人と聞いていましたから、何か記念に書いてほしいと頼みました。老人が言うには、自分は無学なものであるから、書いてあげるような文句も胸に浮かばないが、ことばさえ選んでくれるなら、よろこんで引き受けるとのことでした。そこでわたしは日ごろあんしょう暗誦す

るくらいに好きな古いシナ人の詩のことばを選んでおくりましたが、やがてそれができたといつて届けてくれたのを見ると、じつにみごとな筆で、これにもわたしはおどろかされました。

人の一生はふしぎなものです。来助老人のような刀鍛冶が近江の片いなかに埋もれぎりになってしまわないで、また東京に出る日を迎えようなどとは、老人自身ですら夢にも思わなかったことでしょう。日清戦争が来てみると、来助老人のような人の腕の役に立つ時がもう一度来たのです。ちょうどわたしは、東京湯島ゆしまのほうにいて、郷里くにから上京した母とともに小さな家を借りている時でした。ある日、来助老人がその湯島の家へたずねて来てくれまして、

「自分も、七十の年になって、また世に出ましたよ。」

こんな話が出ました。どんなにわたしもこの再会をよろこびましたろう。

その時、老人は名刺がわりにと行って、自分で打った小刀こがたなを持ってきてくれましたが、そんな小刀一本にも小さなことをおろそかにしない老人の気象があらわれていました。

上京後の来助老人が仕事場は芝の高輪たかなわにできましたから、今度はわたしのほうからたずねて行ったことがあります。一人のお弟子を養子にして、いい相あいづち槌づちができましたとわたしに言ってみせるのも、そこでした。当時の刀鍛冶としても、老人は一番年長者だそうでしたが、いい刀を打つものがだんだんなくなりますか

ら、今のうちに学校を造っておきたい、そして刀鍛冶を育てたいとの話があつたのも、そこでした。老人はまた、一枚の厚い鉄板をわたしの前に取り出してきて見せました。それは日清戦争のかたみでした。敵弾を受けた軍艦の一部をあとで修繕するおりに切り取つたものでした。海戦の記念として、ある海軍将校から一ふりの短刀をその鉄板で作ってくれと頼まれたとの話もその時に出ました。おそらく来助老人のように、一生を刀の道にささげつくして、この世を歩めば歩むほど明るいとこころへ出て行つた刀鍛冶もまれでしょう。

四 呉くみ子さん

呉くれという家はいい学者を出しました。

同じ家に生まれた兄弟の人たちがそろいもそろって学問の道に達したということも、実にゆかしい話ではありませんか。

呉くれくみ子さんも、そういう家に生まれた人でした。この人は明治女学校という学校で習字を教えながら、舎監を兼ねていて、多くの生徒からおかあさんのように慕われた婦人でした。あの歴史のある学校もおしまいの時分には、先生方は一人去り、二人去りするようになったのです。その中で学校の盛んな時も、衰えた時も、すこしも変らずに、いつでも同じように人を教えて倦うまなかつたのは呉くみ子さんでした。ああいう人の生しょうがい涯がいは目立たな

いものですから、わりかた、世間に知られませんし、その人の事跡も多く伝わりません。しかし、わたしは呉くみ子さんのような男も及ばないほど守る力に長けた婦人のあつたことを知っています。一番最後までふみとどまって、あの学校と運命をともにした人も呉くみ子さんでした。

五 栗本先生

物にさきがけするのと、しんがりをつとめるのでは、どっちが勇気があるでしょう。前のほうの人は進んでとげのあるいばらの道を切り開いて行くのですから勇気がなくてはかなわないこと

ですが、あとのほうの人とて勇氣がいることにかけてはそれに劣りません。

皆さんもごぞんじのように、この日本のお国が明治の御代みよとなる前は、徳川の世の末でありました。もう徳川の世の中もこれまでと思うものは、たいがいの人が戸まどいして、仕事もろくに手につかなかった中で、よくあとしまつを怠らなかつた三人の人があります。皆さんは、岩瀬いわせ肥後ひご、小栗おぐり上野こうずけ介のすけの名を覚えておいていただききたい。ここにお話ししようとする栗本くりもと先生も、そういう三人の中の一人です。

栗本先生は若い時の名を哲三てつさんといい、年とつてからの号を鋤じ雲ようんといいました。先生は額も広く、鼻も厚く、耳や口も大きか

ったものですから、「おぼけ栗本」の異名をとったくらいです。それほど並なみはずれた容貌ようぼうの持主でした。もともと本草学ほんぞうがくという学問の家がらをついで薬草のことにくわしいところから、徳川幕府の製薬局につとめた医者の出でありましたが、事情があつて北海道のほうへやられ、函館はこだて奉行組頭ぶぎようくみがしらという役目につきました。先生が頭を持ち上げたのもそのころからです。

当時の函館あたりはまだ「蝦夷地えぞち」と言ひまして、開けたばかりのさみしいところでしたが、先生は六年もそのさみしいところにしんぼうして、病院や医学所を建てたり、薬草園を開いたり、松まつ杉すぎその他の木の苗を内地から移し植えさせたりしました。その「蝦夷地えんようち」に緬羊めんようや牛を飼ひ、養蚕の業につくものができた

のも、先生の監督ではじめたことなのです。疏水の工事を起して久根別川くねべつがわというところから舟を函館へ通すようにしたのも先生でした。

まあ、何もかも新規に始める時というものは、ほねのおれるかわりにどんなにかはりあいのあるものでしょう。どっちを向いても開拓、開拓で、先生のような人の力を待っているものばかりでした。日本のお国もずっと北の果てのほうはロシアぎいかいですが、その時分からやかましかったところ。先生はカラフトの見まわりを命ぜられまして、北緯四十八度にあたるところをきわめ、一冬を極寒の地に送り、それから島々を見めぐって函館に帰ったことあります。

栗本先生の長いしょうがい生涯にとつて、この函館時代の六年はいいしたくの時でありましたろう。わたしが皆さんにお話ししたいと思うのも、そこですよ。先生の函館時代はずいぶんさみしかったようですが、しかしその六年の間に先生がいろいろやってみたことは、それから江戸えどに出てもっと大きな舞台へ乗り出して行つた時の役に立ちました。病院や医学所を建てたことでも、薬草園を開いたことでも、木の苗を移し植えたことでも、牧畜養蚕疏水工事の監督でも、何一つむだになるものはなくて、それがなにかしらほかの仕事をする時の役に立ちました。どうでしょう、先生は自分のしくじりまでも役に立てることを知っていましたよ。これこそほんとうの「経験」というものでしょう。

江戸に召しかえされてからの先生は、昇平校しょうへいこうという名高い学校の頭取とうどりを命ぜられ、上士じょうしの位に進み、さらに鑑察かんさつといつてだれでもうらやむ重い役目をつとめることになりました。そればかりではありません、当時は諸外国の軍艦や商船がだんだんこの国の港に集まって来るようになりまして、日本国じゅう大さわぎの時でしたから、その談判にあたる外国奉行ぶぎようは勇気のある人でなければつとまりません。先生は一番最後にそのむずかしい外国奉行を引きうけ、徳川の大身代おおしんだいを引き回した人の一人でした。さて、明治の御代みよとなってみますと、栗本先生たちが新しい日本のためにいろいろしたくをしておいたことが、あとになってわかってきました。この国を開き、世界諸外国と条約をとり結ぶと

いうことも、先生たちのしたくしておいたことです。下ノ関償金^{しもせき}の談判、横須賀造船所の建築、陸軍軍制の改革それらはみな先生があゝの小栗上野介らとともに力をあわせてしたくしておいたことなのです。今日横須賀に日本の船を造つたり修繕したりする所があつて東洋に一つの名物のようなドックがあるのも、もとをただせば先生たちが徳川の世のあとしまつをしながら、よく「しんがり」をつとめて行つたそのおかたみではありますまいか。いったい、徳川の世の末にあつたことは大きな黒幕のうしろにかくれてしまつて、その舞台の上で働いた人たちの辛苦もほねおりも現われませんから、世の中にそれを知るものも少ないのです。しかし、先生は自分の手がらをじまんするような人ではなく、どこまでも

徳川時代の「しんがり」として、本所ほんじよの北二葉町きたふたばちようというところ
に退き、髪かみの白くなるまで徳川の世の中を見送りました。

わたしは自分の心もやわらかく物にも感じやすい年ごろに、栗本先生のような人を知ったことをしあわせに思います。わたしが本所の北二葉町をおたずねしたころは、先生はもう七十を越して
いまして、いろいろな種類の芍薬しやくやくを庭に植えその住まいをも
「借紅居しやくこうきよ」と名づけて、長い生涯しやうがいのおわりのほうの日を
送っていました。先生から見れば、わたしは子供のようなもので
したが、おたずねするたびによく迎えてくださいまして、
「うちのせがれも、学校から帰って来るころですから、会ってや
つてください。」

などと言われますから、どんな年ごろのむすこさんかと思いましたが、まだ小学校へかよっているほどの少年でした。そんなむすこさんが先生のような年老いた人にあることもめずらしく思いました。

先生もずいぶんトボケた人で、わたしのようはずっと年のちがったものをつかまえても、よくじょうだんを言われました。一番おしまいにわたしがおたずねしたころは、先生はもう七十五六に近く、寝床の上にいるような人でしたが、それでもまくらもとへわたしを呼んで会ってくださいました。わたしはもつと先生にいろいろなことを聞いておけばよかったとあとになってそう思います。でも、先生のような人に会えたというだけでもたくさんに思

います。何かにつけてよく思い出すところをみると、やはり先生にはほかの人とちがったところがあつたからでしょう。

六 古着屋の亭主ていしゆ

わたしは一人の古着屋さんを知っていました。この古着屋さんみのは美濃の国から出てきた人ですが、明治学院にかよっているわたしの学生時代に、くつ屋をしていまして、編み上げのくつを一足造ってくれました。それからわたしも懇意になつた人です。

わたしもこれまでいろいろな人に会いましたが、この古着屋さんほどいろいろなことをやった人を見たこともありません。絵の

具屋の手代、紅^{べに}製造業、紙すきなどから、朝鮮貿易と出かけ、帰つて来て大阪で紀州炭^{ずみ}を売り、東京へ引越して来てまずガラス屋に雇われ、その次がくつ屋となつてこうもり屋を兼ねたと言います。

わたしがこの人を知つたのは、そのくつ屋さんの時代からですが、それから岩^{いわしろ}代の国黒^{くろもり}森というところの鉾山の監督になり、次に株式所の仲^{なかがい}買番頭ともなりました。石蠟^{せきろう}の製造職工ともなつたし、針^{はりしよう}商ともなつたしそれから横浜へ行きました。そのすこし前ですけれど、電池製造の助手ともなりました。ふたびまた針の商人となつて、店をやめてから、こんどは何になつたかと言いますに、まあ、それも一つの何でした——煮染^{にしめしよう}商と

なりました。

それから、小学校の事務員となって、それが最後かと思いましたが、いや活版職工となったのでした。活版職工となって、それからこんどは古着商となりました。

「あつものや荒物屋もやったことがあるしナア。」

そんなことも言い出すような人でした。

この古着屋さんのやったことは、いつでも新規まきなおしのようにでした。前に皆さんにお話ししたくりもと栗本先生などは、まるきりあべこべで、「経験」というものがそう役に立つとはかぎらないことをそれとなく教えてみせてくれたのも、この古着屋さんでした。なぜかといいますに、栗本先生は自分のしくじりまでも役

に立てようと思いました。この人のほうはそれを役に立てようとはしませんでしたから。

第四章 教師はお友だちの中にも

一 教師はお友だちの中にも

お友だちはみんな若かったころのことを思いますと、わたしと、
同じ年のものもありませんでしたが、一番年上でも四つちがいく
らいで、あるものは三つ上、あるものは二つ上、中にはわたしよ
りも年下のものもありました。

そんなに年ごろも近かったものですから、おたがいに長い長い

手紙を書きかわしたり、もらった手紙はたいせつにして何度もくりかえし読んでみたりいたしました。めずらしい本でも手に入れるものがあれば、それをみんなに回して、おたがいに読んで見、時には書き写しなぞしたばかりでなく、おじさんや兄たちに話せないようなことでも語り合うことのできるのはお友だちでした。寒い日でも、なんでも、たずねたりたずねられたりして、一枚のふとんを引き合いながら長い冬の夜を送ったことのあるのも、そういうお友だちなかまででした。

あるお友だちは年若ながら判断というものの力に富み、あるお友だちは思いやりに深く、また、あるお友だちは心の持ち方もよかつたものですから、なにほどわたしは自分のまわりにある人た

ちから教えられたか知れませんが。

二 サクソニーの梅

ドイツのハイネという人が先輩ゲーテをたずねた時のことは、まだわたしの若かったころにある書物の中に見つけておいたことなのですが、あの話は今だにわたしの胸に浮かんできます。若かった日のハイネはあの先輩をたずねる時のことを胸に描きまして、もしゲーテに会うことができたら、あのことを話そう、このことを話そうと、いろいろ思いもよげながら長い冬の夜を送ったこともあるそうです。さて、会ってみると、先輩はただサクソニーの

梅のうまいことをハイネの前に言い出して、えみを浮かべて見せただけであつたということす。

皆さんはこんな話を聞いたら、さぞ物足らなく思うでしょうか。しかしこれはこれでいい。若い時分に先輩に会うことができても、そういきなり、いろいろな話の引き出されるものでもありません。い。おそらく、その人を見たというだけでも満足して、若かつた日のハイネはそう失望することもなく、自分は自分の道を進もうと考へたことでありましたろう。

三 若いお友だちの死

皆さんはお友だちをなくした覚えがありますか。わたしには二十七の若さでなくなった一人のお友だちがありました。わたしがその人を知ったのはなくなる三年前ぐらいからで、そんな短い交際ではありましたが、不思議にもそのお友だちはなくなつたあとになつて、いろいろわたしに話しかけるようになりました。その人ののこした言葉が物を言うようになりました。ほんとに、そのお友だちは遠い草葉のかげからも深い声を送つてよこすような人でした。

四 ははき木

行つても行つても遠くなるもの、木曾きその園原そのはらの里というところのははき木ぎ。これはわたしの郷里くにのほうに残っている古い言い伝えです。

前にもお話ししたように、木曾の古道は深い山の中にあつて、道に迷う旅人もすくなくなつたところから、そんな言い伝えが生まれてきたのでしよう。ははき木とは「ほうきぐさ」のこと。高さ四五尺ぐらの草。平地にあつてそう遠くから望まれるものでもありません。これはやはり高いところから見おろした感じで、谷底に隠れている山里の草のことを言つたものでしよう。そのははき木が行つても行つても遠くなるというところに、けわしい山道を踏みなやんだ昔の人の旅の思いもあらわれていると思

います。おもしろい言い伝えではありませんまいか。この言い伝えにこと寄せて、あるかと思えばないものをははき木にたとえた古い歌もありますよ。

五 心を入れ替えに

どうしてこんな言い伝えを皆さんの前に持ち出したかと言いますに、年若いころのわたしが目じるしとしたものも、ちようどあのははき木に似ていたからです。行っても行ってもそれは遠くなるばかり。それほどわたしの踏み出したところは歩きにくい道でした。どうかして心を入れ替えたいと思ひまして、かずさ上総の国、ふ富

津つといふところに保養に行つてゐる知り人をたずねながら、小さな旅を思い立つたこともあります。

六 上総行きかすさの船が出るころ

そのころ、横浜から上総かすさ行きの船が出ました。荷物を積んで横浜ふつつと富津の間を往復する便船でしたが、船頭に頼めばわずか十銭の船賃でだれでものせてくれました。

わたしは横浜のある橋のたもとからこの船に乗りましたが、ちようどお天気都合はよし、沖に出てからは一ぱいに張つた帆の力で近海を渡るのですから、まるで青畳の上をすべつて行くよう

した。おてんとうさまが高くなりますと、船では昼飯を出してく
れます。それは船頭がたいたこわいごはんと、たくあんのおこ
こぎりです。帆柱のわきで潮風に吹かれながら食べてみますと、
そんな昼飯が実にうまいと思いました。

七 鹿野山かのうざんを越えて

富津ふつつに滞在している知り人の安否を尋ねたあと、その漁村から
歩いて行けば房州ぼうしゅうのほうへ出られる道のあることを知りまし
た。鹿野山かのうざんという山一つ越せば、日蓮にちれんの誕生寺たんじょうじで知られた
小湊こみなとへ出られることをも知りました。かねてわたしは日蓮の

『高祖遺文録』こうそいぶんろく』という本を読みまして、あの鎌倉時代かまくらに名高

い坊さんの生まれた地方を見たいと思っていたのです。それにあの書物をわたしが手に入れたのは普通の本屋でもなくて、東京日本橋人形町の袋物屋でした。藤掛ふじかけなにがしという日蓮宗にちれんしゅうの信者で、頭のはげた隠居さんが一そろい九冊ばかりの、あい色の表紙のついた、こころもち小形の和本を奥の戸だなからさがしだしてきて、それをわたしに売ってくれました。そんな思い出までが手伝って、わたしの足を小湊のほうに向けさせたのです。山越しはかなり寒い時だとも聞きました、白い毛布にくるまりそれいきやはん、わらじばきというおもしろいなりで出かけました。

高い峠にかかるまで、わたしは何ほどの道を歩いたとも、今は

はつきり覚えていません。そのくせ、途中で自分の目に映ったものや、道を聞き聞き歩いて行ったそのころもちなぞを、あとさきのつながりもなく、今だに覚えていることもあります。中には、きのうのこのように、実にあざやかに目に浮かんでくるものもあります。

そう、そう、ある川の流に添うていかだを下す人があつたのもその一つです。それが材木のいかだでなしに、竹のいかだであつたのもめずらしく思われたことを覚えていきます。土地不案内なわたしも、その川について水みなかみ上のほうへ進みさえすればいいと感づきました。だんだん歩いて行くうちに、川の水は谷底の下のほうに見えるようになって、がけづたいの道へ出しました。

その時です。わたしはがけのわきにおっこちている小石を拾いあげ、それを谷底のほうへ投げてみて、うらないごとを試みようと思いました。まだわたしも若かったものですから、もしその小石が川の水にとどいたら、自分でこうときめておいた前途の目じるしを変えずに進もう、もしまたその小石がとどかなかつたら、自分の畑にはないものと思つて、好きな道もあきらめよう、そんなふうにに思い迷つたのです。ところが、どうでしょう、わたしの投げてみた小石は、一つは川の手前に落ち、一つは川の中に落ちて、自分ながらどうしていいかわからなかつたこともありましたよ。

鹿野山は上総かすさと房州の両国にまたがっている山です。わたしの越した峠はその山つづきで、峠の上に一軒屋のあるようなところ

でした。通る人もまれでした。わたしはそれより以前に伊賀いが近江うみのさみしい国境くにざかいを歩いて越したこともありませんが、鹿野山の峠道はもつとさみしいところでした。

八 小湊へ

房州ぼうしゅうの小湊こみなとに近い村に住む農家の若い主人が、このわたしを誕生寺たんじょうじのほうへ案内しようと言ってくれました。

その若い主人は、以前にわたしがお世話になった吉村よしむらさんの家へ奉公に来ていた娘のいさんにあたる人です。いつたい、その時分には、房州へんの農家の娘は東京へ出て奉公したものでな

ければ、およめにもらい手がないと言われたくらいで、一般にそういう気風でしたから、同じ村から来て吉村さんの家につとめた娘は二人もありました。そんなわずかな縁故をたどって、土地不案内なわたしが小湊のほうのことを尋ねに立ち寄りしましたところ、つい引きとめられたのがその若い主人の家です。よく寄ってくれた、土地の案内もしようからまずわらじをぬげ、宿屋に泊まるくらいなら自分らの家に泊まれと言つて、若い主人の母親までがしきりに引きとめてくれるなぞ、思いがけないもてなしぶりでした。だんだん聞いてみましたら、東京での主人すじからこんなにあらずねてきてもらえることはめつたにない、これというのでも娘たちが奉公先での勤めぶりに怠りのなかつた証拠であると言つて、その

ことが農家の人たちをよろこばせたのです。どうして農家とは言
いまして、炉ばたは広く、蔵のあるような相応な暮らしの家で、
こんな家庭からでも娘を東京へ修業に送るのか、とそうわたしは
思いました。

あくる日は、その家の若い主人の案内で、誕生寺のかいわいに
小半日の時を送りました。その海岸まで出て行けば網も干してあ
りますし、なまぐさいおさかなのにおいもしてきますし、海から
とりたてのひじきをゆでるところかとみえて、のてん野天におおがま大釜をか
けたどべっつ土竈からは青々とした煙の立ち上るのも目につきました。
その晩はまた若い主人の家のほうに帰って、みんなでいっしょ
に農家らしいいろいろに集まりました。吉村さんにつとめてい

た娘たちも、親元へ帰ってからそれぞれ縁づいていましたが、わたしの出かけて行つたのを聞いて会いに来ました。いずれもはや若いおつかさんらしい人たちになっていました。あかあかと燃え上がる炉の火が一同の顔に映るようなところで、東京の吉村さんたちのうわさがいろいろ出ましたつけ。

この房州行きには、わたしも誕生寺を見るだけにまんぞくしました。日蓮にちれんが青年時代を送つたという清澄山きよすみやままでは行きませんでした。

九 玄関番

恩人、吉村さんの家といえは、わたしが少年期から青年期にかけての日を送ったところですよ。お話のついでに、自分の書生時代のことをここにすこし書きつけてみましょう。

吉村のおじさんは交際の広い人でしたから、いろいろな客がおじさんの家へたずねてきましたが、その中でも玄関からはいつてくる人と、勝手口からはいつてくる人とありました。勝手口からたずねてくるのは、おもに内わの人か、前だれがけに角帯をしめた日本橋大伝馬町へんの大店の若者か、芝居の替り目ごとおおでんまちように新番付を配りに来る芝居茶屋の若い衆か、近くの河岸おおだなに住む町家のおかみさんや娘などの人たちでした。

「行徳ぎょうとく」

と声をかけて、毎日行徳方面からおさかなをかついでくる男が荷をおろすのも、その勝手口でした。

玄関からたずねてくる客は表口の格子こうしをあけてはいりまして、取り次ぎを頼むのですが、その応接がわたしのつとめでした。うやうやしく手をついておじぎをすること、客の名を奥へ通すこと、案内すること、茶を運ぶこと、客のはきものを直しておくこと、それから庭先をはききよめることなど、長い月日の間にはわたしも慣れまして、それを自分のつとめと思つたばかりでなく、玄関にすわることをいつそ楽しく思うようにもなりました。わたしはよくそのせまい小さなへやで好きな本を読みました。今になつてみますと、わたしの勉強はほかのお友だちとも違ひまして、こん

な玄関番が土台になったかと思ひます。というのは、いろいろな用事でおじさんのところへたずねてくる男や女の客を迎えたり送ったりするうちに、いくらかずつでも、さまざまな世の中を見る目があいて行つたばかりでなく、わたしたちとはまったく教育の受け方の違つた少年や青年、東京の下町あたりに年季づとめする町家の若者、それから地方出の奉公人などが気風のみこめるようになったのも、こんな玄関番のおかげだからでした。

一〇 『小公子』の訳者

『小公子』の訳者として知られた若松わかまつしずこ賤子さんがなくなりました

て、そのなきがらが墓地のほうに送られた日のことでした。

この人は本名をお嘉志^{かし}さんといい、横浜フエリス女学校を早く卒業して、巖^{いわもと}本さんにかたづいた人ですが、その学才と人からとはむかしを知っているものに惜しまれたばかりでなく、お嘉志さんのだんなさんはまた当時明治女学校の校長でもあり女学雑誌社の社長でもありまして、『女学雑誌』と『評論』の二雑誌を出していましたが、学校や雑誌に関係のある男女の人たちまでが新しい墓じるしのまわりに集まりました。

あれはわたしなどのまだ青年のころのことでしたが、その日の葬式について、今だにわたしの胸に浮かんでくるものが一つあります。それは『小公子』の訳者を記念するために、いろいろな書

物や雑誌の類が数多くその墓のほとりにうずめられたことでした。まあ、堅い石の棺かんの中に置いてすらどうかと思われるようなものを、まして漆もはいつていない木の箱の中に納めたのですから、よくいく日もちこたえようとは掛念けねんされましたが、しかし土の中に書物の類をしまいましたら、何がなしにその墓のほとりを立ち去りがたく思わせました。あれから、もうかなりの年月がたちます。しかし時を記念しようとする人々の心は長くその土に残りました。

なんと皆さん、世の学者がどこに昔の代よをさがしだすかといいますが、多くはそれを土の中から見つけてきます。父、母、兄弟、親戚しんせき、お友だち、そのほかかつて親しかった人たちで、この世

においとまごいをして行くものがうずめられたりほうむられたりするところは、みな土の中です。土ほどなくなつた人を思い出させるものもないかわりに、またそれほどいろいろなもの生まれてくる場所ありません。

第五章

みやぎの
宮城野

一 宮城野

仙^{せん}台^{だい}に東北学院という学校があります。その学校へわたしは年若な一教師として行くことになりました。母もそのころは東京でしたが、その母を都に残し、お友だちにも別れまして、東京上野の停車場からひとり東北の空に向かいました。もつとも、その時はまったく初めての東北の旅でもありません。それより以前に

も一度、汽車で白河しらかわを越し、秋草のさきみだれているのを車の窓からながめて、行って、仙台よりも先の一の関いちせきというところにある知り人をたずねたこともあります。しかし、こんどはただの旅でもなく、一教師として出かけて行って、めずらしい仙台の地を踏んだので、にわかには東京のほうの空も遠くなったように思われしました。

仙台というところは城下町として発達したところです。ここには名高い城跡がありますし、古い士族屋敷の町がありますし、むかしは市が立ったろうかと思われるような辻つじがあります。ここは東北のほうの教育の中心地です。ここにはいろいろな教育機関というものがあって、若い男女の学生たちが集まってきていました。

ここは東北の都会といわれるくらいのところで、朝晩の空気からして東京あたりとはだいぶ違います。ここには静かな光線がさして、いまして、学問でもしようというものには町全体が北向きの勉強部屋の窓のようなところです。ここは阿武隈川あぶくまがわへもそう遠くなく、一里ばかり行けば太平洋の岸へも出られて、歩き回る場所に事を欠きません。まあ、仙台へ着いたその晩から、思わずわたしはホツとしましたよ。それまで歩きづめに歩いてほんとうの休息ということも知らなかったようなわたしは、ようやくのことで胸一ぱいによい空気を吸うことのできる宮城野みやぎののふところへ飛びこんだようなものでした。

仙台へ来た当座、しばらくわたしは同じ東北学院へ教えに通う

図画の教師で布施ふせさんという人の家に置いてもらいましたが、その家は広瀬ひろせ川がわのほとりにありました。遠く光るよいの明星が川向こうの空によく見えました。母からも東京のお友だちからも離れて行って、旅の空にそんな一つの星のすがたを見つけたのもうれしく思いました。

二 松島

「わしが国さで見せたいものは」という歌にもあるとおり、東北の人はなかなかお国じまんですから、何よりもまず松島を見せたいと布施ふせさんが言いまして、学校のお休みの日にわたしを案内し

てくれました。

塩釜しおがまから船で出ました。清く澄んだ海水を通して、海の藻もの

浮かび流れるのが見えるほど、よく晴れ渡った秋の日でした。なるほど、あそこにも島、ここにも島。船で見て通りますと、指を折って数えつくすこともできません。その島影を人の姿にたとえて言ってみるなら、立っているもの、すわっているもの、しゃがんでいるもの、寝そべっているもの、その姿は千差万別ですが、いずれも松の緑の模様のついた着物を着ているのが目につきまます。松島はそういうところですよ。ここには「ばばが鉦打かねつ念仏島ねんぶつじま」
という名の島もあります。そんなおばあさんの着ているはんてんまでが、おそろいの松の模様でした。

三 母を葬りに

「ハハキトク、スグコイ。」

こんな電報が東京からとどきました。

母の病気とは思いがけないことでしたが、わたしはすぐにしたくして、学校へも届を出し、大急ぎで仙^{せん}台^{だい}をたちました。東京の留守宅は本^{ほん}郷^{ごう}森川町というところにありますから、急いで行つて見ましたが、ざんねんなことにはもう間に合いませんでした。

その年の秋、東京にはごく激しいコレラがやりました、たく

さんな人がそのためにたおれたと聞きます。母もそのひとりであったのです。留守宅には母よりもつとからだの弱いものもいましたが、一番きれいな好きで、働くことも好きで、ふだんから食べ物にも気をつけるほうの母が、そんな病気にかかりました。行つて見ますと、おまわりさんは門口に立っています。そこいらは消毒のお薬でぶんぶんにおつています。母は本所ほんじよの病院のほうへ送られて、そこでなくなつたあとでした。

よくよくわたしも両親には縁の薄かつたほうです。幼少のころに親たちのひざもとを離れたきり、父の臨終にはそのまくらもとにもいませんでしたし、ずっと後になつて母とは二年ほどいつしよに東京で暮らしてみる月日もありませんでしたが、そのころのわたし

にはまた母を養うだけの十分な力もありませんでした。せめて仙台へは母だけでも引き取り、小さな家でも借りて、二人で暮らそうと思ひまして、その日の来るのを楽しみにしていたところへ、こんな病気の知らせです。とうとう、わたしは母の死に目にも会わずじまいでした。

本所の病院のほうへ行つて母の遺骨を引き取るから、砂村すなむらといふところにあつた火葬場まで見送つた暗い晩のことも忘れられません。なにしろ病気が病気で、留守宅に残るものは交通遮断しやだんの時ですから、砂村への見送りもわたし一人でした。翌朝、骨納め。わたしはその遺骨を抱いて、郷里くくににあるわが家の墓地へ葬るため、東京をたつことにしました。その時は名古屋まで汽車で、

名古屋から先は人力車で郷里へ向かいましたが、途中の峠の上あたりにはもう何度となく霜の来たところもありました。

四 両親の墓

姉夫婦とその娘とは木曾福島から、おじたちはとなり村の吾妻村からというふうに、親戚や古い知り人は郷里の神坂村へと集まって来ていました。村の人たちは母の葬式のしたくをして、遺骨の着くのを待っていてくれたのです。わたしは暗くなつてから村の入り口に着きました。

そこまで行きますと、ちようちゃんをつけて出迎えてくれる人に

会いました。声をかけてみると、以前にわが家へ出入りをしてきた男の一人です。そして、わたしの荷物を持つと言ってくれます。もともとわが家の先祖はこの地方のために働いた人たちで、村も先祖が開き、寺も先祖が建てたというくらいですから、そういう古くからの気風が伝わっていて、なんにも土地のために尽くしたことのない一書生までがこんな出迎えを受けることさえ自分には過ぎたことのように思いました。わたしは足をふるさとに踏み入れたばかりで、まだそんな父の時代というものが根深く残っていることをも思いました。

わが家の墓地は村の裏側にある古い丘の上で、永昌寺えいしょうじというお寺の境内につづいたところにあります。すぎの木立ちの間から、

浅い谷の向こうに木曾らしい石をのせた人家の板屋根、色づいた柿かきのこずえなぞが見えるところです。大黒屋だいくくやとか、八幡屋やわたやとか、その他いろいろな屋号のついた家々のこけむしたお墓が並んだわきを通つて、すぎの枯れ葉の落ちているしめつた土をふんで行くだけでも、なんとなく心の改まつてくるようなところです。その墓地の突きあたりに、どまんじゅうのかたちかたちに小高く土を盛りあげ、青々とした芝草の色もむかしを語り顔なのが、父の長く眠っている場所でした。永昌寺の本堂で母の葬儀をすませたあと、遺骨は父の墓のわきにうずめましたから、同じかたちのものが二つそこに並びました。

墓は死んだ者のためにあるのではなくて、生き残る者のために

あるのだと、ある人もそう申しましたっけ。

五 かしどりのあいさつ

かし鳥があいさつに来ました。

この鳥はおばあさんのようなしやがれた声で、わたしにあいさつして言うことには、

「お前さんは覚えていなさるだろうが、おれの好きなえのきの実を拾いにお前さまも子供の時分にはよくあの木の下へ遊びにおいでなすった。それから、おれが青いふのはいった小さな羽を落とすしてやると、お前さまはあの木の下でおれの羽を拾うのを楽しみ

にしておいでなすった。」

わたしの郷里では、ていねいに人のことを呼ぶには「お前さま」、自分のことはだれに向かつて「おれ」です。そこで、かしどりはことばをつづけて、次のように語りました。「ごらんのとおり、先年の大火で村も焼けました。お前さまの生まれた古い屋敷のあとも、今は桑畑です。あの桑畑からは、たった三つだけ焼け残った物が出てきました。一つは古い鏡、一つはお前さまがどうさまの石の印、もう一つはおとうさまの部屋の前にあったぼたんの根から吹き出した芽。ほんとに——あの古い鏡も大やけどサ。そんなわけで、さっそく普請のできた家もあり、かりの住まいにがまんしているものもありますよ。なんにしてもあの大火の

あとですからね。あれから村も変わりました。まあ、今だにむかしを恋しがって、ふるさとのふところにするがりにすぎりついている手あいもないではありませんが、しかももうそんな時ではなくなりました。お乳の出もしないちぶさをしやぶっているようなことはだめで、早く気のついた村の者は皆この焼け跡からたち上がろうとしています。そうです。この災難のどん底からです。神坂村みさかむらも今は建て直るさいちゆうですよ。」

六 帰郷の日

幼い時分からわたしの好きなえなさん恵那山は、もう一度自分を迎えて

くれるように見えました。あの山のふもとにある村をよく見たら、何ほどのものが生き返ってきているか知れないとは思いましたが、わたしも仙^{せん}台^{だい}のほうに学校のつとめをひかえていて、古いなじみのある家々をたずねる時もそうありませんでした。乳母としてわたしを抱いたりおぶったりしてくれたお雛^{ひな}も、伊那^{いな}のほうへ行つて暮らしているとやらで、もはや村にもいませんでした。先年の村の大火にあつたわが家の古い屋敷で惜しいと思われるのは、裏の土蔵の焼け落ちたことでした。あの土蔵の二階は全部が書^{しよも}物庫^{つぐら}で、木曾谷^{きそだに}の歴史を語る古文書や、じじののこした写本や、父が一生かかって集めておいた和書漢書の類はことごとく失われたのですから。

姉夫婦は木曾福島きそふくしまをさして帰って行く人たちです。そこでわたしもいつしよに神坂村みさかむらを立ちました。お別れに寄った家々の人たちは、いずれも門口に出て、わたしたちを見送っていました。神坂村から次の吾妻村あずまむらまでの二里の間は男垂山おたるやまなどの迫ってきているところで、深い山林の中です。吾妻村まで行きますと、おじの家があります。そこがわたしの母の生まれたところでした。

そのころの木曾路はまだ、わたしが初めて上京した時に歩いたままの道でした。行く先の谷のかげに休み茶屋などが隠れていて、石をのせたその板屋根からは青々とした煙の立ち登るのが見えませんでした。皮のむなび、麻のはえはらいから、紋のついた腹掛けまで、昔のままの荷馬がいい鈴の音をさせながら行ったり来たりしていた

るのもその道でした。

棧橋かけはしというところまで行きますと、わたしはおさるさんに会

いました。そのおさるさんは休み茶屋に飼われていたのです。

「お前さんもたつしやでしたか。」

とわたしが尋ねますと、おさるさんは小首をかしげまして、

「いえ、それはお前さまの覚えちがいでしよう。お前さまの言うのは、たぶん、おれの親ざることでしょう。おれもあの親ざると同じように、長いことこの棧橋に暮らしています。おれはちいさい時分からこの木曾川の音をきいています、いくら聞いてもあきないのは、水の声ですよ。」

「それはうらやましい。わたしは十の年に郷里くにを出たものですか

ら、久しぶりにここを通ります。でも、山育ちは争われないものとみえて、わたしの顔を見ると、山ざる、山ざるという人がよくあります。」

「ハーン。してみると、お前さまもさるなかまか。」

こんなあいさつをかわした後、棧橋のおさるさんにも別れて、また奥深く進みました。秋も深いころでしたから、山という山、谷という谷は皆、紅葉にうずめつくされていました。この帰郷には、姉夫婦とともに木曾福島まで行き、それから東北の空をさして仙台の学校のほうへ引きかえして行きました。

七 仙台の宿

仙台^{せんだい}へ引き返してから、わたしは布施^{ふせ}さんの家の人たちとも別れて、名掛町^{なかけちょう}というところにあつた宿のほうへ移りました。そこは三浦屋といつて、旅人宿と下宿を兼ねていましたが、わたしの借りたのはその奥の二階の部屋^{へや}でした。ほんとに、わたしの仙台時代はその二階で始まつたと言つてもいい。窓の外にはとなりの石屋さんの石をならべた裏庭が目の下に見えます。わたしは石屋さんと競争で目をさまして、朝も早くから机にむかいました。

八 荒浜

海が鳴ります。

荒浜あらはまのほうからその音が聞えてきます。荒浜というところは

外海にむいた砂地の多い漁村です。仙台せんだいから一里ほどあります。

そんな遠いほうで鳴る海の音が名掛町なかけちょうの宿までよく聞えます。

皆さんはどこかで海鳴りを聞いたことがありますか。古いことばに潮騒しおさいというのがありますが、海鳴りはその音でしょう。海の荒れる前か、あるいは海の荒れたあとかに、潮のさわぐ音でしょう。それは大きなほらの貝でも遠くのほうで吹き鳴らしているような音です。びっくりするような海の声です。わたしも東北の地方へ来て、初めてあんな音を耳にしました。

海といえ、わたしのような山国に生まれて深い森林の中に育

ったものは、特別そちらのほうへ心を誘われます。そういうわたしは、相州鎌倉にも小田原にも、上総の富津にも時を送ったことがあり、西は四日市、神戸、須磨明石から土佐の高知まで行って見て、まんざら海を知らないでもありませんでした。しかし、布施さんといっしょに仙台から宮城野を通り、荒浜まで歩いて、見わたすかぎり砂浜の続いたところに出て行った時ほど、心を打たれたこともあります。

その時わたしは生まれて初めて大洋を望んだと言ってもいいほどに思いました。そればかりでなく、布施さんをそそのかしまして、その砂浜に着物をぬぎすて、二人して寄せくる波の間を泳いだこともあります。そのへんは海水を浴びに来るものがよく波に

さらわれるところだと言われるくらいの岸でしたが、しかしわたしはただ大洋を望むだけにはまんぞくしませんでした。

九 耳のいい人

仙^{せん}台^{だい}へ来て弱ったことは、ことばのなまりの多いことでした。何か土地の人から話しかけられても、世間に交際の広い男や女の話に通じないようなことはまずありませんでしたが、おばあさんどうしが語り合うことばなどは、てんで聞き取れないくらいでした。わたしは東北学院へ来て学んでいる生徒の作文の中にも、何ほどその地方ことばのなまりを見つけたか知れません。

仙台のような都会ですらこのとおりですから、まして荒^あ浜^{らはま}のあたりに住む人たちの言葉には土地のなまりも濃い。ある年、あの漁村に悪い病がはやつて、それを調べるために内務省から役人や医者の出張したことがあるそうです。ところが、荒浜の漁師たちの言うことは、それらの役人や医者はおろか、仙台から付いて行つた人にすらよく聞き取れなかつたそうです。

ここに一人、耳のいい人がありました。

その人を仙台から連れて来て、はじめて用が足りたということでした。そんな漁師ことばの通弁をだれがつとめたかと言いますに、その耳のいい人はもはや三十年近くも仙台地方に住む外国の宣教師でした。ローマ旧教をひろめに日本へ渡つて来た人で、ジ

ヤツキという名前のフランス人でした。このジャツキ先生、ギリシア語の知識もあつて、学問のある坊さんでしたが、年百年じゅう、同じような黒いぼうしをかぶり、黒い服を着て、なりにもふりにもかまわずに荒浜のほうまで宗しゅうし旨をひろめに行くうちに、そんな漁師ことばの通弁がつとまるほど、いい耳を持つようになつたのです。

一〇 木像拝見

瑞巖寺ずいがんじは東北地方に名高い、松島にある古い大きな寺で、そこに安置してある伊達政宗だてまさむねの木像も世に知られています。ちよう

どわたしの甥おいが東京から仙せん台だいの宿へたずねてきたものですから、二人で松島見物を兼ねて、木像拝見と出かけました。あいにく、その木像はるすだというのですが、しかし声はするのです。そこでわたしが尋ねてみましたら、こんな返事でした。

「いや、遠いところをよくたずねてきてくれました。木像はわたしですがきようはだれにも会えません。わたしもこんなうすぐらいところにいるものですから、このお寺の小僧が見物人を案内して来ては、わたしの鼻の先へろうそくの火を突きつけるので、だいな鼻を焦がしてしまった。あの小僧も気がきかない。もうすこしでわたしは大やけどをすることでしたよ。これでもわたしは人間らしいものの尊いところを持っているつもりです。見に来

てくださるなら、そういうものを見ていただきたい。あんまり見世物扱いにされたくはありません。」

無言な木像にも、声はありますね。

一一 松風

この瑞巖寺の近くに雄島おしまという小さな島がありまして、いくつかの洞穴ほらあなが海にむいたところに隠れています。昔の坊さんたちが来て座禅ざぜんをした跡だと聞きます。あそこにもここにもというふうに、その洞穴ほらあなが続いています。中には、岩壁にむかい合つて静かにすわるために、坊さん自身の手で造りかえたかに見えるほ

ど、そまつながら岩屋の形をそなえたところもあります。あまり取りつくろわれた古跡などを見るよりも、かえって昔のことがしのばれるのも、そういうかくれた場所です。そんなところへ行つて立つてみますと耳に入る松風よりほかに長く遠いひびきを伝えるものもあります。

昔の人がほんとうに物を考えた場所だという気のでてくるのも、その岩壁の前です。わたしは古い松の枝を通して海に映る夕日を望みながら、しばらくそこに立ちつくしていたこともありました。

一一一 長いもの

長いもの、せんだい仙台地方に伝わってきた「さんさしぐれ」の古い歌の節。

布施ふせさんはそれをよく覚えていて、ある日わたしに歌ってみせてくれました。どうして布施さんの口からそんな古い歌の節が出てきたかと言いますに、君の家がらはこの地方の郷土として代々仙台侯に仕えてきた歴史があるからでした。あの「さんさしぐれ」の歌は、甲高い女の声よりも、むしろ低いところを歌える男の声に適していて、ゆっくり歌うべきものだそうです。あれをわたしに歌って聞かせる間、しばらく布施さんは「時」というものも忘れていたようでした。いかにもゆったりと迫らないでしかも深く聞える古風な歌に耳を傾けていますと、その抑揚のある節の一つ

一つが実に長くつづいて行きました。切れたかと思うと、まだ続いていっているようなものでした。

それもそのはずです。あれはただの俗謡でもなくて、古い歴史のある朝鮮征伐のおりの凱旋がいせんの曲だと聞きます。おそらく、昔の仙台武士は軍の旅いくさから帰って来て、たがいに祝いの酒をくみかわし、手拍子でも打ちながら、心ゆくばかりあの歌を合唱したものでありましたろう。陣中の着物も解き、重い刀もわきに置いて、ふたたび妻子に迎えられた時のよろこびは、いくら歌っても歌いつくせないようなものでありましたろう。

たいとさけがそろって出かけるところでした。さけは白っぽい腹掛けに身をかため、たいは赤いはち巻きをしていました。

さけが言うには、たいさん、わたしはこれで旅なれています。これからわたしは北へ伸のして、大海を味わってきますよ。このとおりわたしは元気ですが、まだこんな油の乗りかたではまんぞくしません。わたしは行って、もつとからだを鍛えてきましょう。年の暮れまでには帰って来るつもりですが、来年はどんないいお正月が来るか。おそらくみんな春待つ思いで、かちぐり、ごまめ、こんぶなぞを用意し、いろいろと年越しのしたくをして、わたしの帰りを待っていてくれるでしょう。わたしがいなければ、仙台

の人は年を取れませんかね。

たいが言うには、お前さんのその元気には驚きます。お前さんの鼻は少し曲がっているように見えますが、それでいて、みんなに好かれるには、これにも驚きます。わたしをごらんなさい、みんなで寄つてたかつていろいろなことを言つて、きんかざんおき金華山沖のたいは、目の下一尺もあつて、値がただみたようで、いいおさかなですことの、なんのかんのと、えらいお世話です。しかし、わたしは何事もしんぼうしなければなりません。今にいい時節がめぐつて来て、桜の春とでもなりましたら、どんな貧しい家へもたずねて行ってやりましょう。めつたにわたしを迎えたことのない人たちをびつくりさしてやりましょう、そしてみんなにどつきりご

ちそうしてやりましょう。

一四 朝

仙台せんだいには、わたしは一年しかいませんでした。その一年はわたしにとって、一生のうちの最も楽しい時の一つでした。わたしの迎えた朝のような時でした。しかし、これはただの朝でもありません。そのことを皆さんにお話ししましょう。

わたしは皆さんの前に一つのたとえ話を持ち出しますよ。ここに一人の学校生徒がありますよ。春先というものはだれでも眠いものですが、その学校生徒もちょうど春先のような眠いさか

りの年ごろで、朝早くにわとりが鳴き出しても、なかなか目がさめません。一番どりはもとよりのこと、三番どりの声がするころになっても、まだ生徒は眠がつて、夢を見ていました。こんなにわとりの鳴くのも知らないでいるくらいですから、寝ぼけまなこに太陽を望みましても、ほとほとその笑顔を仰いだこともなくて月日を送っていたのです。ただ朝になれば東の空から出て晩には西の空に沈んで行くような、そんな赤いしよんぼりした日輪しか知りませんでした。太陽はその生徒から離れて行つて、おもしろくもおかしくもない顔つきのものとしか目に映りませんでした。どうでしょう、こんな朝寝坊にも早く目のさめる時が来ましたよ。気がついてみると、にわとりは暗いうちから起きて生徒を呼

んでいました。

そのうちに、太陽が遠く東の空に登ってきました。それは地平線を離れて飛びあがるような勢いのものでした。每晚沈んで行く日輪とも思えないほどの生き生きとした美しいものでした。生徒はびっくりして、生まれて初めてそんな太陽が自分の目に映ってきたことを知ったのです。にわとりはにわとりで、もう一つおまけにというふうには、新しい朝の誕生を告げていたのです。

わたしが仙台で送った一年は、ちょうどこの学校生徒がにわとりの鳴き声を聞きつけた時のようなものでした。朝になりますと、だんだん空が明けはなれて行くように、過ぎ去ったことはわたしから離れて行きました。そこいらは明るくなってきました。物は生

き返ってきます。草木も新しい色を帯びてきます。何を見ても目がさめるようでした。

ほんとに、仙台の一年はよかった。わたしのようなものにも、そんな朝が来ました。その一年の間ほど本のよく読めた時もありません。どうしてこんなことをお話しするかと言いますに、自分のよろこびとしたことを皆さんにも分けたいと思うからです。それには待っていてくださる事です。新しい太陽は、きつと皆さんのなかにも登ってくるでしょう。

第六章 姉

一 姉

姉ですか。姉は木曾福島きそふくしまのほうにある高瀬たかせの家にかたづいていました。女のきょうだいといえ、わたしにはこの姉一人でしたが、だいたい年が違いますし、それに遠く離れてばかり暮らして、まして、おたがいにいっしょになるおりもめつたになかったので

皆さんにも前にお話ししたように、母がなくなりました時、わたしは郷里の神坂村みさかむらのほうで、久しぶりの姉と落ち合い、その葬式を済まし、父の墓をもともともむらしまして、その帰りに木曾福島まで姉といっしょでした。神坂村から木曾福島の町まで十二里です。木曾路きそじの深いところですが、その時は、ほかに連れもありましたが、なにしろ山坂は多し、木曾川きそがわづたいの道を女の足ではそうはかどらないものですから、途中二晩も泊まりました。しかし、この道は楽しく、それまで遠いところにいた姉がにわかにに近く思われてきました。そう申してはなんです、わたしたちの母の死が、こんな姉きょうだい弟だいにのものを近く思わせるようにしたのです。

二 姉の家

ある夏、保福寺峠ほうふくじとうげや鳥居峠とりいとうげを越して木曾福島きそふくしまに姉の家をたずねました。その時はわたし一人でもなく、吉村のむすこさんを連れて行きました。今の吉村さんもそのころはまだ中学生であつたのです。吉村一家の人たちは木曾福島の出ですから、この中学生にとつても初めて両親の郷里を見る時でした。

木曾福島は御岳おんたけへの登山口につづいた町です。昔は名高いお関所であつたところです。そのお関所の跡に近く、町はずれの丘の地勢について折れ曲がつた石段を登り、古風な門をはいります

と、玄関のところにおいてある衝立ついたてが目につきません。衝立ついたては皆さんもごぞんじのように、ふすま障子に似て台がありますが、その家のは藁の看板を造り直したもので、奇応丸きおうがん、高瀬謹製の文字が読まれます。そこが姉の家でした。姉夫婦も元気な時で天井の高い、広い炬燵たでわたしたちを迎えてくれました。

木曾川はこの町の中央を流れる川です。姉の家の門前からがけ下のほうに福島ふくしまの町がよく見えまして、川の瀬の音までが手に取るように聞えています。対岸に並ぶ家々、お寺の屋根、古い屋敷の跡なぞから、深い原生林につつまれた山腹の地勢までが望まれます。こんなに用心よくまとまった町のながめのあるところもめずらしい。それを見ても、古いお関所を中心にして発達してきた

町だということがわかりますね。

オヤ、さかなな鈴の音もしますよ。それがこの谷底へ活気をそそぎ入れるように聞えてきていますよ。

「チリンチリン、チリンチリン。」

夏のさかりのことで、白い着物に白いうしろはち巻き、ひのきが檜木のさ笠を肩にかけ、登山のつえをついた御岳参りの人たちが、腰の鈴を振り鳴らしながら、威勢よく町へくりこんでくるところでした。

三 くり飯の好きな橘翁さま

わたしは姉の家の入口ばかり皆さんにお話しして、まだ奥のほうをお目につけなかつた。この高瀬の家では、先祖の中に橘翁きつおうさまという人がありまして、毎年の忌日にはかならずその人の画像の掛物を取り出し、それを奥の床の間の壁に掛け、その人の好物であつたというくりめしを供えるとか。この橘翁さまが高瀬の家に伝わつた薬を造りはじめた人です。

橘翁さまはかなり遠い先のことを考えておいた人とみえます。そのことをここにすこしお話ししてみれば、もともと高瀬の家の先祖は代々木曾福島のお関所番をつとめた武士であり、高瀬の兄（姉の夫）の父親の代には砲術のご指南番（指導の役）までしてお関所を固めたもので、したがって部下に使われる人たちもすく

なくなかったのですが、そういう身分の低い士族は多く貧しかったのです。橘翁さまの製薬は、部下の人たちにも内職を与え、土地のうるおいにもなるように、との願いから始めたことらしい。高瀬で造り出した奇応丸きおうがんは、木曾山でとれる熊の胆くまを土台にして、それにシナ朝鮮のほうから来る麝香じゃこうやにんじんなどをを用い、形もごく小粒な飲みい丸薬として金粉きんぷんをかけたものですが、正直な材料が使つてあるものですから小児に飲ませるにいいと言われて、だんだん諸国にひろまったものようです。

さて、高瀬の兄の代になつてみますと、この人は若い時から早く名古屋に出で、新しい教育を受けたくらいですから、漢方で造つた先祖伝来の薬などを守つている時世ではないと考え、家も飛

び出してしまつて、東京に出ていろいろやつてみたということでした。どうでしょう、この兄のいろいろな試みよりも、先祖ののこした仕事のほうが根深かつたのです。古い薬はいつまでも、売れて、子孫のものがよくやつて行かれるばかりでなく、くすりかた薬方かたの番頭さんや大ぜいの小僧さんたちまでりっぱに養えるのです。高瀬の兄はいろいろやつてみた末、もう一度住み慣れた屋根の下に帰つてきて、黒光りのするほど時代のついた大黒柱のわきにすわつてみて、先祖のおそるべきことを知つたそうです。なんと、くりめしの好きな橘翁さまはその画像の中に残つて、子孫の末を見守つていてくださることでしょう。

四 馬市の立つ町

木曾福島は馬市の立つ町としても昔から知られています。その馬市のことを木曾地方のものは「お毛附」とも言います。木曾は馬の産地で、馬を飼わない百姓はなかつたくらいですから、福島に市の立つた時は近在のものが木曾駒を持ち寄ります。それを買いに諸国から博勞が入りこんでできます。町もにぎわいの時です。

橘翁さまの始めた薬はそんな時の役にも立って、町へ集まつて来た博勞が帰りがけに、よく姉の家へ立ち寄り、いく袋となく高瀬の薬を求めて行くと言います。聞いてみれば、博勞はひいて

いる馬に高瀬の薬を添え、それを木曾駒きそごまの証拠として、ほかの買
い手へ売り渡す時に用いるとか。一度ひろまった薬はどんなところ
で、どんなふうの木曾みやげになるものとも知れませんが。これ
には橘翁さまも草葉のかげで、にが笑いしていられることではし
うか。

五 行商

しかし、橘翁きつおうさまの始めた薬がこんなにひろまるまでには、
そのかげに何ほどの人のほねおりがかくれているとも知れませんが。
もとより、木曾山の熊くまの胆いに目をつけて、それを土台に製薬の

業を思い立ったのは、橘翁さまあつてのことです。しかし、姉の家の薬をこれまでにひろめ、先祖伝来のしごとを築き上げたのは、何代もかかった行商の力によることが多いのです。

高瀬の薬くすり方かたが、昔はその主人と主従の間がらで、部下の士族であつたことは前にもお話ししたとおりですが、そういう人たちが番頭さんと呼ばれる時世になつてからも、毎年手を分けて諸国へ行商に出ました。西は美濃みの、尾張おわり、伊勢いせから、北は越後えちごの方面へかけ、ふろしき包みにした薬の箱をしよい、日に焼け、雨にぬれることをもいとわずに、遠い道を往復し、去年の薬の残つたところへは引き替えに新規の薬の袋を置いてくるほどにして、高瀬の薬をひろめて歩いたのも、そういう人たちでした。わたしが

姉の家をたずねたころはおいおい薬くすり方かたも変り、あるものは年
とつて身を退き、あるものは若手に代よをゆずつたと聞きましたが、
それでも一人のいい番頭さんが残つて高瀬の兄を助けながら、製
薬いっさいのことをきりまわしていました。

姉の家の店座敷から奥のほうへ通う中央の広いへやは薬くすり方かた
の仕事場にあててあつて、静かな日の光が障子にさしてきている
ところだ。そこには薬種やくしゆを刻むもの、袋を造るもの、丸薬の
数を量り入れるもの、それぞれの受け持ちがあり、中には薬の紙
を折ることを内職にして古い士族屋敷の町のほうからかよつてく
る老人もありまして、みんな秋の行商のしたくにいそがしがつて
いました。

六 古い茶わん

姉の家には、昔から伝わる漢籍、兵書、歌書、その他の書物もすくなくはありませんでした。裏庭にある土蔵の二階は本箱でいっぱいでした。高瀬の兄はわたしにむかつて、それらの蔵書を勝手に探れと言ってくれ、姉はまた姉で、古い絵、古い手紙、香の道具、うるしぬりの器、陶器のたぐいなぞを取り出してきて見せてくれました。その中に、高瀬の兄の先代が愛用したという古い茶わんが出てきました。

そのおかたみはシナからでも渡って来た陶器らしく、厚手の焼

きで、青みがかった色つやまでがいやみのないものでした。あまりよくできているものですから、わたしがほめましたら、姉はいいねいに茶わんをふき、それをわたしの前において、ほしくばくれてもいいと言うのです。わたしもまだそんな古い茶わんをもらい受けてながめ楽しむ年でもありませんでしたから、せつかく姉がそう言ってくれても、それをもらって帰る気にはなりません。それに、その茶わんは茶器でもなくて古い食器です。いかによくなってきた陶器でも、むかしの人が飯を盛った茶わんで食う気にはなれない、やはり自分は自分の茶わんで食いたいと思いました。

七 秋を迎えて

八月も半ばになりますと、つばめは木曾谷きそだにの空を帰って行きま
す。姉の家の門かどぐち口へもつばめはあいさつに来て、

「長々お世話さまになりました。」

と言うらしいのです。いくら遠い国のほうから渡ってきたもので
も、春から軒先を借りていて、かわいいひなまでもうけるくらい
なら、もつとことばが通じそうなものですが、つばめの言うこと
はペチャ、クチャ、ペチャ、クチャ——まるで異人のような早口
です。

「どうぞ、また来年もよろしく。」

どこまでも南国弁のつばめは、わからないことばづかいでその

おいとまごいに来て、古巢に別れを告げて行きました。

木曾川の岸には、うるい、露菊つゆぎくのたぐいが咲きみだれ、山には石斛せつこく、岩千鳥いわちどり、鷺草さぎそうなどの咲き出すのも、そのころです。かじかのなく声もまれになつて行きました、桑つみのひな歌がおもしろく聞えるころから、姉の家の裏庭には、草花のながめがことにうれしく、九月にはいつてからは白い壁のかげにある秋海しゅうかい棠いどうの花もさき出しました。

野菜や草花をそだてることの好きな姉はその裏庭つづきの畑にうりを植えたり、夕顔のたなを造らせておいたりして、毎朝の畑の見回りが何よりの楽しみであつたようです。そのへんから裏山へかけては、なだらかな傾斜になつていましたから、わたしも細

い道を楽しみにして、枝のたれさがった夏なしのかけ、ぶどうだなのもと、またゆり畑の間などを歩き回り、年とつた百姓を相手に木曾福島の風俗、祭の夜のにぎやかさ、耕作の上のことなどを語りながらいなかのふぜいを味わいました。

旧暦七月十五夜には月がことに明るくこの谷間にさし入りました。姉の家のは、甥おいや姪めいから、年不相応に額ぬかぎわのはげた番頭さんまで奥座敷に集まりました、あかりを遠く置き、縁側に出て、思い思いの夜ばなしを持ち寄りました。木曾福島もせまいところで、わたしが吉よし村むらのむすこさんを連れながら東京から来たと言え、そんないささかな人の動きまでが、一晚じゆうに町へ知れ渡っているくらいのところ。ほんとにせきばらい一つう

っかりできないところだ、そんな話の出るのもその縁側でした。姉のもとへかよつてくる女の髪結いさんは唾おしながらに、それはかしいもので、姉はその人の身ぶり手まねを通して、町のできごとを手取るように知ることができる、そんな話も出ましたっけ。

八 夕顔よりかんぴょうへ

青い夕顔も長く大きく生なりました。

あのつるから切りたての新しい色つやのを、どかりとそこへ置いた時は、だれでも子供のようにうれしい。新しい秋のみのりですからね。ほかの家と同じように、姉のところでも青い夕顔を輪

切りにして、かんぴように造るしたくをしました。まずその輪切りにしたやつをまないたの上にのせます。薄くけずった二本の竹がまないたの上に平行に打ちつけてあります。額ひたいつきもまだ若々しい薬くすり方かたの若者なぞが、細身のほうちようを片手に、腕まくりで、そのまないたの前にすわったところは絵にしても見たいほどさわやかなものです。ほうちようが順に動いて、輪切りにされた夕顔が二本の竹の間をすべって行きますと、そこから生のままのかんぴようが生まれてきます。どうかすると五六尺あまりもあるような長い長いやつも生まれてきます。それを日にあて風にかわかしてかんぴように造りあげるのです。田園のふぜいはそんなところにも深いものがありました。

九 涼しそうなもの

涼しそうなもの、方壺山人ほうこさんじんのはすの葉のかさ。

方壺山人は名字みょうじを渡辺わたなべといい、徳川の時代に木曾福島きそでふくしまの名

君とうたわれた山村良りょうゆう由公が詩文の師匠と頼んだ人で、「菁せ

莪館いがかん」(良由公の建てた学校)の学問を興したことにもあずか

つて力のあつたらしい人ですが、この人が大きなはすの葉を頭にかぶった図がわたしの見つけた書物の中に残っていました。青いはすの葉をかさのかわりとは、木曾川きそがわへつりに行く人でも、ちよつと思ひ付きそうもないものです。

一〇 木曾のはえ

よしむら
吉村のむすこさんは秋の新学期のしたくもありまして、町での親類回りをすました上、東京のほうへ先に帰って行きましたが、わたしは自分の仕事を持ってきていたので、そのすむまで姉の家にとどまりました。

早いものですね、こんなふうにして一夏を送るうちに、わたしの借りている店座敷へはせみが舞いこみ、めつきり秋らしくなつた風は座敷の中を通りぬけて行きました。皆さんにも聞かせたいのは、川上からおおてばし大手橋のほうへ流れるきそがわ木曾川の音ですが、あの

水が岩を越すよりもつと早く、夏の暑さが流れて行つてしまひました。

この一夏の間、わたしは姉の口からなき父の話をよく聞かされました。父は熱心な子の教育者で、わたしも六つ七つのころから読書の道を父より授けられ、十の年に両親のひざもとを離れたのもやはり父の意見によつてのことでしたが、そんな子供の時分の記憶しか自分にはないものですから、姉から聞く父の話には初めて知るようなこともすくなくなつたのです。わたしのきようだいの中でも、姉は一番の父親思いでしたからね。父は神坂村みさかむらのほうからこの木曾福島の町へもよく来たらしい。この町には父が歌の友だちという人もあつたらしい。わたしは姉の家で、父を知

つているという一人の老人にも会いました。

どれ、姉の家のことはこのくらいにとどめて、もつとほかのお話に移りましょう。姉も元気な時でしたから何よりわたしにはうれしかったのです。そういえば、わたしたちが広い炬ばたで食事するごとに、姉の家に使われている下女ははえを追い通しました。それほど木曾ははえの多いところですよ。深い山の中で、しかも馬の産地であるくらいですから、はえばかりでなく、ぶよもいます。高瀬の兄はじめ、家の人たちに礼を述べて、わたしがこの町を辞した朝は秋風の身にしみるようなころでしたが、道ばたに隠れているはえが来て旅の着物にまで取りつきました。

第七章 浅間のふもと

一 浅間のふもと

木曾^{きそ}福島^{ふくしま}の姉の家から東京のほうへ帰って行く時のことでした。わたしはその途中で信州^{しんしゅう}小諸^{こもろ}に木村先生の住むことを思い出しました。木村先生はわたしの少年時代に、東京神田^{かんだ}の共立学舎で語学を教わった古い教師でありますし、その後^ごわたしが芝白^{しばしろ}金の^{かね}明治学院へかよったころにも先生は近くの^{たかなわ}高輪^{たかなわ}に住んでいたも

のですから、よくおたずねしたことがありました。先生が信州のいなかに退かれてからはお目にかかるおりもなかったので、久しぶりで先生のお顔を見たいと思い、小諸の耳取みみとりというところにある先生の家をたずねました。わたしが小諸の土を踏んでみたのも、それが最初の時でした。

人の世はふしぎなものですね。その時わたしが木村先生をおたずねしなかったら、小諸義塾こもろぎじゆくのあることも知らなかったでしょうし、先生の教育事業を助けるようにとのご相談も受けなかったでしょう。わたしはよく考えた上でとお答えして、いったん東京へ帰りました。ただ先生のような人が小諸あたりに退いて、学校を建て、地方の青年を相手に田園生活というものを楽しんでおら

れるのをゆかしく思ったことでした。

自分のことをここで少しお話してみれば、わたしもせんだい仙台から東京へ帰るようになってから、またまた自分の仕事をつづけましたが、まだまだ力の足りないことを思うにつけ、あの東北のし菅ようぶた蒲田の浜で海の空気を胸いっぱいなしばたけに吸ったり、どひ畑やぶどやぶどあぶくまがわう畑のあぶくまがわ見られる仙台郊外を土樋どひというほうまで歩き回ったり、あるいは阿武隈川あぶくまがわの流れるところまで行ってみたりしたような、そんな静かな心は持てなかったのです。そればかりでなく、自分らの切り開いて出て行こうとする道にはお手本というものも少なかつたし、足もとも暗かつたし、これから先、自分のなかから生まれてくるものを守り育てて行くには、かなりの勇氣と忍耐とがい

りました。

どうかして、もつと自分を新しくしたい。そう思っているところへ小諸義塾の話がありました、いなか教師として出かけてきてはどうかとの木村先生からの手紙をも受け取ったのです。

小諸からは関君せきという人がわざわざ東京まで出て来てくれました。木村先生はじめ町の人たちのすすめを伝えてくれました。関君は明治学院の出身で、わたしとは古いなじみの間がらでした。当時、京都のほうにも教師の口はありましたが、わたしはいなかに退いてもつと勉強したいと心を決めましたから、報酬もすくなく骨もおれる小諸のほうの学校を選びました。そんなわけで、翌年の四月には浅間のふもとをさして、いなか教師として出かけま

した。

新規、新規、見るもの聞くものわたしには新規なことばかり。

第一、自分のつとめに通う小諸義塾までが、まだようやく形の整いかけたばかりのような新規な学校でした。しかし、その義塾の二階の教室から、遠くたでしな蓼科の山つづぎの見える窓のところへ行って、そこから信州南佐久みなみさくの奥のほうの高原地などを望むたびに、わたしはようやくのことで静かに勉強のできるいなかに、もう一度自分の身を置いたように思いました。その窓の近くには、小諸の士族屋敷の一部の草屋根も見え、ところどころには柳のこずえの薄く青みがかつたのもあり、ちょうどわたしが出かけて行ったところはおそい春がようやく浅間のふもとに近づいてきた時分

でした。たとえ学舎は小さくとも、わたしはほかの先生がたとにも働くことを楽しく考えました。

小諸本町の裏手に馬場裏ばばうらというところがあります。そこにある古い士族屋敷で草屋根の家がわたしの借りうけた住まいです。わたしの小諸時代は七年もその草屋根の下で続いたのです。

でも、わたしは小諸に来て山を望んだ朝から、あの白い雪の残った遠い山々、浅間あさま、牙齒ぎっばのような山つづき、影の多い谷々、高いがけくずれのあと、それから淡い煙のような山のいただきの雲の群れ、すべてそれらのものが朝の光を帯びてわたしの目に映った時から、なんとなくわたしのなかにはまったく新規なものが始まったように思ったのです。

二 千ヨンまげ

小諸の荒町あらまちには、髪を昔風の千ヨンまげに結んだ鍛冶屋かじやさんが、たった一人残っていました。明治の御代みよとなつてから、そういう風俗はすたれ、みんな簡易で軽便な散髪に移りましたから、これは小諸へんに見られる最後の千ヨンまげでありましたろう。もつとも、手ぬぐいでうしろはち巻きにただけでも、からだがい引きしまるように、昔の人がかたく髪を束ね、その根を細く強い元結もとゆいで引きしめて、頭に力を入れたろうかと思ひますと、いちがいにそれをはやりおくれの古くさい風俗として笑えません。お

そらく荒町の鍛冶屋さんも、鉄の槌^{つち}を握る時の助けとして、一生そんなチョンまげで通したのでしよう。この鍛冶屋さんは、わたしたちの学校の体操教師で大井さんという人のおとうさんでした。わたしは大井さんを通して、この鍛冶屋のおとうさんにくわを一丁頼みました。さあ、これです、これがおやじの打ったくわですと言つて、大井さんがさげてきてくれたのを見ましたら、なるほどチョンまげで通すほどの人の氣象がそのがっしりとした柄のついた一丁のくわにもあらわれていました。

三 土と水

どうしてこんなくわなぞを造ってもらったかと言いますに、わたしもいなかへ来たからには学校へ通うかたわらくわでも握って、自分のこころを鍛えるばかりでなく、からだをも鍛えようとしたからでした。

おもしろい風ふうてい体のお百姓ができあがりました。わたしはほおかむり、しりはしよりで、ももひきもはいていません。それに素足ですよ。馬場裏ばばうらの家の裏には、もと桑畑であつたところが空地くうちになつていましたから、そこを借りることにしましたが、さくの外に行く人は慣れないわたしが働くのを見てクスクス笑つて通りました。それにもかまわず、わたしは古い桑の根を掘りおこしたり、石ころを運び捨てたりしました。掘り起した土の中からはど

うかするとかわいらしい貝割葉かいわればが見つかりましたが、それはすもものたねについて出てくるやつでした。わたしたちの学校には辰さんたつという小使いがいます。この男の家では小作をやっています。その辰さんが見回りに来て、くわの持ち方からわたしに教えてくれました。野菜を植えるなら、まずじゃがいもやねぎのような作りやすいものから始めて、それから大根、なす、さやえんどう、きうりなどに及ぼすがいいと教えてくれるのも辰さんです。わたしは、こんな読書の余暇にするいささかの業からも、大地からじかからだへ伝わってくるよろこびを覚えて、なまなましいにおいのある土の中を素足で歩き回りました。時には畑の土を取って、それを自分の足の弱い皮膚にこすりつけました。

その畑の横手には、家の勝手口から通うことのできる細い流れもあります。遠く山のすそのほうから引いてきてある水です。毎朝わたしはその細い流れへ顔を洗いに行きます。そこはせんたくすることを禁じられているような場所ですが、どうかするとこまかい砂が水にまじって流れてきていて、手にもすくえないことがあります。清水しみずと言いたいが、飲用水には使いがたい。そんな水ではありましたが、都会から行ったわたしは餓うえかわいた旅人のようにして、その荒く冷たい水の中へ自分の両手をひたし、そこからわきあがる新しいよろこびを覚えました。

四 地大根

浅間あさまのふもとでは、石ころの多い土地にふさわしい野菜がとれます。その一つに、土地の人たちが地じ大根だいこんと呼んでいるのがあります。あの練馬ねりまあたりの大根を見た目には、これでも大根かと思われるほど、ずっと形もちいさく、色もそれほど白くなく、葉を切り落とした根元のところはかぶのような赤みがかつた色のものです。

長い冬のために野菜をたくわえるころが来ますと、その大根を洗ってたくあんにつけるしたくをするのが、小諸こもろへんでの年中行事の一つになっています。わたしが東京から出かけて行った初めのころには、よくそう思いました。この土地には、こんなあわれ

な大根しかできないのかと。一年暮らし、二年暮らしするうちに、ふしぎにもその堅い大根でつけたたくあんには、かみしめればかみしめるほど、なんとも言われない味が出てきました。上州あたりの大根などはそれに比べると、いつそ水くさいと思うようになりしました。

ひどいものです。はげしい風と、砂と、やけ石の間のような火山のすそにも、住めば住まわれるようになりますね。まあ、その地大根の味をかみあてたころから、わたしの小諸時代がほんとうに始まったと言つてもいいのですよ。

五 山の上へ来る冬

なんという長い冬が山の上へ来ると皆さんもお考えでしょう。

こもろ

小諸の四季は四月、五月を春とし、六月、七月、八月を夏とし、九月、十月を秋として、十一月から翌三月の末までは冬が続きます。冬は五か月もの長さにわたるのです。春は東京あたりより一月もおくれまして、梅の花がようやく四月に開き、秋は都より一月早く来て、霜にぬれた葉は十月にはすでに赤くなります。十月の二十三日ごろといえますと野べに初霜を見、十一月の七日ごろには初雪が浅間へ来しました。

こうして長い冬が山の上へやってきます。なにしろ海拔三千尺、浅間一帯の山腹にある小諸の位置はほとんど筑波つくばの嶺みねと同じ高さ

と言いますからね。十二月の中旬からはもう天寒く、日の光も薄く、千曲川ちくまがわの流れも氷に閉ざされて、浅間のけぶりも隠れて見えなくなります。それから年を越して二月の終りまで、暗く寂しい雪空には日を見ることすらまれになつて行き、庭に降る雪は消えないで積もつた上に積もるものですから、しまいには家の縁側より高く、夜ごとに柱のしみ割れる音がして、硯すずりの海も凍り果てました。

わたしはうずらのように小さくなつて、雪のふりうずめる山里の家の窓でよく本を開きました。軒ばのつらは剣つるぎのようだとも言つてみた、その長さは二尺にも三尺にも及びます。最初の一冬はわたしもここへ死ぬかと思うほど、おおげさに言えばそんな

に寒く思いましたが、でも一年暮らし、二年暮らしするうちに、ずっとわたしのからだには「抵抗力」というものが出てきました。わたしはきびしい寒さを恐れないで、塩のような雪が飛んでくる中を走り回り、山国の冬の楽しさを知るようになりました。わたしの教える学生たちは町に住むものばかりでなく、かなり遠くの村から学びに来る農家の子弟もありましたが、それらの青年は一里も二里もある雪道を毎日平気でかよっていました。

六 わかめ売り

「わかめはようござんすかねえ。」

そう言つて呼んでくる声を聞くようになりますと、さすがに山^や家^{まが}もいい陽気に向かいます。越後路^{えちごじ}からの女のわかめ売りの声です。紺がすりの着物に、手^て甲^{っこう}をはめ、荷物をしよつた行商姿の風俗の女がいく組も来て、遠く越後のほうでとれた海草を信濃^{しなの}の山の上まで売りに来ます。五か月もの長い冬を通り越したあと、ふるい野菜はすでに尽き、新しい野菜にはまだ早いという四月のころには、わたしたちはこのわかめ売りの来るのを待ち暮らしているようなものです。さんしよの芽の青くもえ出す時分になつて、においのいい田^{でん}楽^{がく}などをかいでみる心持は、山の上の冬ごもりをしたものでなければわかりません。

そういえば、木の芽が田楽になり、竹の子がすしになり、よも

ぎがもちになるころは、そこいらはもう桃やすももの花でいっぱい
 います。

七 わらびと竹の子

小諸こもろの竹の子は、鶺鴒ときくぼ窪くぼという近在きんざいのほうからくるわらびを
 見て笑いだしました。小諸にはこんもりとした竹の林と言えるほ
 どのものはほとんど見当たりません。真竹まだけ、孟宗もうそうの類は、この
 地方には十分に成長しません。でも、細い竹のやぶがありまして、
 春先にはそこから細い竹の子が頭を持ち上げます。

竹の子がわらびに言うには、どうしてお前さんたちはそんなに

皆、首をかしげながら出てくるのか。わたしをござらん、このとおりわたしはひと息に延びて行きます。なるべくまつすぐに、それがわたしたちの親竹から教えられたことです。

わらびはこの話を聞いていましたが、やがてこう答えました。

それは草木と生まれまして、新しい生命を願わないものはありません。ただお前さんには土を割って出て行く剣先のような親ゆずりの力がある。わたしにはそんな親ゆずりのがったものがない。ですから、背を曲げたあかごのようにして出て行かないことには、土を持ち上げることができません。あるものはすすくとひと息に延び、あるものは頭をたれながらゆっくりと延びます。しかし、それは同じことですよ、と。

八 佐久ことば

佐久あたりでは、ほかの地方ともちがって、夕方のあいさつに「こんばんは」とは言いません。「おつかれ」と言います。日暮れがたの道で行き会う人ごとに聞くものはそのあいさつです。町で働いた人はそれを言っていたがいに一日のつかれをねぎらい、野で働いたものはそれを言っていたがいに鋤くわを肩にしながら帰って行きます。冬が長ければ長いだけ、春から秋へかけては活動の時期ですから、そこから「おつかれ」のような佐久ことばも生まれてきたのでしょう。こうした土地に住み慣れてみれば、黄ばんだほ

おずきちょうちんを空に掛けたような名月までが、「おつかれ」と言つて、遠い森の上へ登つて行くように見えますよ。

九 桃

桃について、かつてわたしは次のようなことばを書きつけてみたことがあります。

五月の菖蒲しやうぶが男の子にふさわしいように、桃の花はおのずから少女にふさわしい。長い花ぶさをうなだれ、花べんの胸をひろげて、物思いに沈んだような海かい棠どうのすがたは、と
うてい少女のものではありません。茶色で、やや赤みを帯び

た枝の素生すばえに堅くつけたあの桃のつぼみこそ少女のものです。二尺にも三尺にも及ぶほど勢いこんで延びてきているようなその素生すばえを見たばかりでも、おい先こもる少女の命を思わせるものがあります。素朴そぼくにふくらんだところはかわやなぎの趣に似て、もつと恥を含み、しかもおとめらしい誇りをみせているものは桃のつぼみです。

これはおもに花のことを言ったのですが、桃は実になってからもいい。皆さんは桃の生なっている木のまわりを歩いたことがありますか。枝からもぎたてのしずくのしたたるばかりのようなくだものを味わったことがありますか。

守山もりやまというところの桃畑は、わたしたちの義塾ぎじゅくの木村先生

がお百姓にすすめて、桃の苗木なえぎを移し植えさせたことからはじめつたと聞きます。

先生は佐久地方の地味がすいみつとう水蜜桃に適すると気づいた最初の人でしたらう。その守山のお百姓から桃を食べにこいと言われて、わたしも小諸から出かけて行ったことがあります。桃畑の小屋の中で味わった青い桃のうまさは忘れられません。あれは大きなおかあさんのような土のふところに育ち、豊かな種の持ち主で、どつさりわたしたちにごちそうしてくれりようなやつでした。

一〇 かわずの見学

ちくまがわ
千曲川の川下を見てきたかわずと、川上を見てきたかわずとが小諸で落ち合いました。そしてたがいに見てきた地方のことで言い争いました。

一方のかわずに言わせると、千曲川は犀川さいかわといっしょになつてからがいい、つまり川中島しもから下のほうがいいと言いますし、一方のかわずはまた、白田うすだあたりから上かみのほうがいいと言っています、たがいにそのことを争つたのです。どうあつても千曲川は川下がいいと一方が言えば、いや、川上がいいと一方が言い張りしました。

そんなら、自分の見てきた地方のことを一つ聞いてもらおうと、川上へ行つてきたかわずが言い出しました。信濃しなのの一部だけ見て、

これが山国全体の姿だと思われるもこまる。それには、どうしても千曲川の上流について、南佐久みなみさくの地方へはいつてみないとわからないというのが、このかわずでした。

川上を見てきたかわずはまず岩村田いわむらだあたりから始めました。

あの町の大字金おおあざかねの手てというところのかどに石があります。その石が、これより南、甲州街道と旅人に教えています。

その道について南へさして行くと、白田の町へ出る。白田に稲いなりやま

荷山公園というところがあって、公園前の橋のたもとあたりから望んだ千曲川のながめは実にいい。あれから八つが岳山脈たけのふもとへかけて、南佐久の谷が目の前にひらけています。千曲川はその谷を流れる大河で、岸に住む人たちの風俗やことばのなまり

も川下とはいくらか違うようです。岸をさかのぼるにつれて、馬ま流ながしあたりからは、さすがの大河もけいりゆう 流ながしの勢いに変るのですが、川の中心が右岸のほうへひどくかしいでいるために、左岸には川底があらわれ、砂は盛り上がり、川上から押し流された大石が埋まって、ところどころにかわやなぎ、あしのくさむらなどが茂っています。右岸に見られるのは、かえで、かば、なら、うるしの類です。甲州街道はそのかげにあるのです。しんぼうのいい越後えちごの商人は昔からそこを往復したと聞きます。直江津なおえつから来る塩しほやかなの荷にがそんな山地まで深入りしたのも、もっぱらその街道を千曲川について、さかのぼったものだそうです。

両岸には、南みなみまき牧まき、北きたまき牧まき、相木あいぎなどの村々がちらばって

まして、金峯山きんぶさん、国師が岳こくし、甲武信が岳たけ、甲武信が岳たけ、三国山みくにやまの高くそびえたかたちを望むこともでき、また、甲州にまたがった八つが岳やの山つづきには、赤々とした大きくずれの跡をながめることもできます。その谷の突き当たったところが海の口村で、千曲川の岸もそのへんまで行くと、いかにも川上らしい。高い山々の間をめぐりにめぐって流れる水の声には、思わず、耳をそばだてます。山の空気というものが、そんなにあたりを深く思わせるのです。

海の口村は、もと川岸にありましたのが、川水のおふれたために、村の人たちは高原のすそへよって移り住んだとのこと。風や雪を防ぐために石をのせた板屋根を見ると、深山みやまずまいも思いやられます。そのへんに住んでいる人たちの仕事には、飼馬かいば、耕作、

柚、炭焼きなどありますが、わけても飼馬かいばには熱心で、女ですら馬の性質をよく暗記しているほどです。そんな土地がらですから、娘ざかりのものが馬に乗って、暗い夜道を通るなどは平気でしよう。その人たちが男を助けて外でかいがいしく働く時の風俗は、ももひき、きやはんで、めくらじまの手てっこう甲をはめています。かぶりものは編みがさです。まあ、かわずふぜいがそんなことを言つてはなんです、これも見学のためと思つて見てきたところで、娘も美しいと言いたいけれど、さて強いと言つたほうが至当で、すこやかな生き生きとしたおもぎしのものが多いようです。

川上を見てきたかわずは、いろいろと土地の馬の話をも聞いてきてそのことを相手のかわずかわずに語り聞かせました。

あのシナのほうで清しんぷつ仏戦争があつた後、フランス兵の用いた軍馬は日本陸軍省に買い取られて、海を越して渡つて来たのとこと。その中の十三頭が種馬として信州へ移されたのです。氣象のいさましい「アルゼリー」種の馬が南佐久の奥へはいつたのは、その時のこと。今日ひと口に雑種となえているのは、その「アルゼリー」種をさしたものと聞きます。その後、米国産の「浅間号」という名高い種馬もはいりこんだそうです。それから次第に馬の改良ということが始まる、馬うまいち市は一年増しに盛んになる、そのうわさがなにがしの宮殿下のお耳にまでとどくようになつたとか。殿下は当時陸軍騎兵つき大佐で、かくれもない馬好きでいらせられるのですから、御寵愛ごちようあいの「フアラリース」とい

うアラビヤ産を種馬として南佐久へお貸し付けになりますと、人が立つたの立たないのじやありません。「フアラリース」の血を分けた馬が三十四頭という呼び声になりました。殿下はお喜びのあまり、ある年の秋、野辺山のべやまが原はらへと仰せいだされたという話が残っています。その時は四千人あまりの男や女がああ牧場に集まったと聞きます。馬も三百頭ではきかなかつたそうです。海の口村はじまって以来のにぎわいであつたとのこと。

川上を見てきたかわずはさらに話をつづけて、その牧場のある野辺山が原へも行つてきたことを語りました。そこは八つが岳の山腹にあたり、海の口村からすぐで、四里四方もある高原です。

晴れて行く高原の霧のながめも、千曲川の川下しか知らないか

わずに見せたかったと言いました。すこしすその見えた八つが岳が次第にけわしい山の骨をあらわしてきて、しまいに朝の光を帯びたいただきまでが見られるころは影が山から山へさしてきていきます。甲州にまたがる山脈の色もいくたびか變つて見えます。急に日があたってきたかと思うと、ちぎれちぎれの綿のような雲も浮かんで、いつのまにか青空が見られます。そうになると、男おとこや

山、ま金峯山、女おんなやま山、甲武信が岳などの山々が残りなくあら

われて、遠くその間を流れるのが千曲川の源なのです。かすかに見えるのが、それが山里の中の山里ともいふべき川上の村落です。

このかわずが見てきたのは高原の秋でした。そこいらには木立ちもところどころ。枝という枝はいずれも南向きに延びて、冬季

に吹く風のはげしさも思いやられたとか。白かばは多く落葉して高く空に突つ立ち、細葉ほそばのやなぎはうずくまるように低くかくれています。秋の光を送る風がさわがしく吹きわたると、草は黄な波を打って、かしわの葉もうらがえって見えます。ここかしこに日のあたたつた大石は、秋のさびしさを語っているのです。

「ありしおで」の葉をたれ、弘こうぼうな法菜の花をもつのもそこです。「かしばみ」の實の道に落ちこぼれているのもそこです。

そこにはまた、野の鳥も住みかかれています。ささの葉のかけにす巢を造るひばりは、老いて春先ほどの勢いがありません。うずらは物音に驚いたように、ときどき草の中から飛び立つやつですが、「ヒュヒュ、ヒュヒュ」と鳴くその声からして野の鳥らしい。

見れば、ぶかつこうな羽をひろげて、舞いあがろうとして、やがてぱったり落ちるように草の中へ引きかくれます。

ほかの樹木が黄に枯れがれとした中に、まだ緑のかげをとどめたところも、あるにはあります。それは水の流れを旅人に教えるので、そこには雑木がおい茂つて、泉に添うて枝をたれて、深く根を浸しているのです。村々の農夫も秋の労働に追われるかして、その高原に馬を放すものはすくない時でもありました。八つが岳山脈の南のすそに住む山梨やまなしの農夫ばかりは、冬季のまぐさに乏しいので、遠くそこまで馬を引いて来て草を刈り集めているのでした。

さすがに野辺山が原へ行つて遠く千曲川の源まで望んできたか

わずの言うことはくわしい。一方のかわずはしきりに耳を傾けて、川上の話を聞いていましたが、やがてこう言い出しました。

「なるほど、お前さんの話を聞いてみると、自分の見学のせまかったことがわかりました。わたしは川下のことしか知らなかった。これがそもそも争いのもとでした。これからわたしもひとつ川上を心がけます。そのかわり、お前さんも川下へ来て見てください。どうして川下も、なかなかようござんすぜ。」

一一 書物は野にも川原にも

最初わたしは三年ほどの約束で、いなか教師として出かけてき

たものですが、小諸こもろは仙台せんだいのような土地がらともちがい、教育の機関というものがそうそろっていませんし、語るに友もすくないようなところですから、何かしら東京のほうにいるお友だちにおくれるような気ばかりしていました。第一、いなか教師の身では、読みたい書物もそうたやすくは手にはいりません。わたしは義塾ぎじゅくの試験休みとか、養蚕休みとかにわずかの暇を見つけ、書物をさがしによく東京へ出かけて、持ち帰ったもので貧しい自分の書だなをかざりました。それとてかぎりのあることでした。そこでわたしは都にあるお友だちばかりうらやまずに、もつと正しく物を見ることを学びたいと思い立ち、それにはまず手近なところから始めようと思いいちました。よく見れば、馬場裏ばばうらから学校

へ通う道ばたの雑草までが、石がきの間なぞのかくれたところにいい本をひろげて、このわたしを待っていてくれたのです。

そんなわけで、三年ほどの約束で来たわたしの前には、別の世界がひらけて行きました。ほんとに読もうとさえ思えば書物はわたしの行く先にはありました。野にも川原にもありました。とうとう、七年も小諸にしんぼうして、となりのおばさんからも、生徒の父兄からも、学校の小使からも、麦畑に出て働いているお百姓からも物を学びました。わたしは教師として行き、生徒として帰りました。

第八章 十二の話

一 読書の声

ある日、東京本郷ほんごうの西片町にしかたまちへんを歩いていきますと、ふとある家からへい越しにもれてくる読書の声がわたしの耳にはいりました。思うさま声を出して本を読んでいる人の声です。それが往來まで聞えてきているのです。声を出して本を読むことはわたしも好きですから、しばらくそのへいの外に立ち聞きしていました。

はて、どういふ人が住むのかと思ひまして、その家の門かどぐち口に
出ている表札をのぞきましたら、少年のころに神田の共立学舎で
物を教わつた長沢先生の名が出ておりました。どうも聞いたこと
のある声だとは思ひながら、その表札を見るまでは思ひ出せな
つたのですが、やはり声の主人は自分の古い教師でした。ゆかし
く思ひました。

二 斎藤さんの羽織のひも

ある日、わたしは斎藤さいとうさんとむかいあつてすわつていました。
斎藤さんは号を緑雨りよくうといい、別に正直しょうじき正太夫しょうだゆうともいって、

筆とり物を書く上ではわたしたちの先輩にあたりました。正直正太夫と名のるくらいですから、ひととちがつたところがありました。て、どうもあの斎藤さんの目つきはよくないと、世間には毛ぎらいするものもなくはありませんでしたが、しかしうわついたところなどは少しもなく、わたしのお友だちはみな感心していました。この斎藤さん、記憶のいいことも評判で、たいがいのものが忘れてしまうようなことまでよく覚えていてる人でしたが、わたしと話している間に何か思いついたことがあると見え、小さな紙のきれをくれと言うのです。どうするのかと思つて見ていますと、斎藤さんは細い指でそれを折りたたんで、羽織のひもの乳のあたりに結びつけておきました。あとになつて羽織のひもとく時に、覚

えておきたいことを思い出そうとするらしい。その時、わたしは齋藤さんが日ごろの心づかいというものを見つけたように思いました。

記憶のいい人はやはり違いますね。

三 手製のおもちや

ある日、頼みたい用事があつて本郷湯島から谷町たにまちをへだてたところに住む中村不折ふせつさんの以前の住まいをたずねたことがあります。当時、中村さんは新進な画家で、独立の気象きしやうに富んだ美術家でしたが、さすがに大成するくらいの人には若い時からちが

ったところがありました。自分の子供にくれるおもちゃなども手造りにし、厚手な白木の板の上に線を引いて、子供のよろこびそのうな金魚でも、うさぎでも、みな自分でかいたものでした。画家のお手のものとはいいながら、あの中村さんが幼いものに与えているいいおもちゃには、わたしも心を動かされたことを覚えていません。中村さんはすべてにそういう心がけを持っていて、細かい絵筆の力一つでしつかりと立っているような人でした。

四 小山喜代野さんの碑銘

信濃しなのの山の上に咲く石楠しやくなげの花の純粹にもたとえたいような、

その美しい性質は、おのずから多くの人の敬慕するところとなり、世にもまれに見る家庭をつくり、夫房ぼうぜん全氏との間に四人の愛児をもうけ、母としてのいつくしみ、妻としての思いを親しき人々の胸に残しおきて、大正十二年九月の震災のために、三十七歳の惜しい年ごろでこの世をさつたこやまきよの小山喜代野夫人の記念に。これはなき人のおもかげ、愛と徳とのなごり、かぐわしい魂のかたみである。

右、小山家から頼まれて、喜代野さんのために書いた碑銘です。震災記念というところから、小山家では茅が崎ちさきにある製糸工場内の庭に喜代野さんの胸像を置き、その台石にこのことばを刻みつけて、いささかなき人をしのぶたよりとしたものです。

喜代野さんは画家の小山敬三さんのねえさんにあたる人で、わたしも小諸時代こもろに二年ほど教えたことがあり、その娘のころを知っているところから、そんな縁故で小山家から碑銘を頼まれたのでした。あれは、学習舎といまして、木村先生の奥さんが小諸へんの女子のため自宅に私塾を開いた時、本町ほんまちの大塚さんおおつか、鴛ときくぼ窪いの井出さんいで、その他の娘たちとともに、荒町あらまちからかよつていたのが小山喜代野さんでした。ささやかな家庭風の学舎のことであり、教室用の机を片づけたり、部屋をそうじしたりする雑用は、すべて当番の生徒が受け持ちとなっていました。その中でも喜代野さんのは自分の好きなことをあとまわしにし、みんないやがる用事をよろこんで引き受け、かげへ回つてはよく働いてい

ました。これは喜代野さんの性格をよくあらわしていると思いましたが。喜代野さんは娘の時分から、そういう人でした。言うのはどうさないようでも、なかなかできないことです。

五 子供のお友だちの一

子供のお友だちであったような昔の人たちのことを、すこしここに書きつけましょう。

おともも、「怒り」というものを忘れないうちは、子供のお友だちにはなれないのですが、そういう中にもいろいろおもしろい人たちがありました。そういう人たちが昔にあったことを思い

ますと、そこまで「怒り」を忘れることができただけでしよう。

良寛りょうかん上人しょうにん

のような子供のお友だちもめずらしい。上人は

ずっと年とるまで幼い心を忘れないで、七十になっても子供を相手にかくれんぼをしたり、まりをついたり「オハジキ」をしたりしたといひます。上人はずいぶん思い切ったところまで出て行った人で、時には死んだもののまねをして道ばたに横になっていることもありました。それを見ると子供らは大よろこびで、その上から草をかける、木の葉をかける、しまいには木の葉や草で上人をうずめてしまつて、笑い楽しんだこともありました。そんないたずらをする子供らが木の葉や草を集めて運んでくる間でも、上人は死んだふりをして、静かに道ばたに横になりながら、子供ら

のすることを楽しんでいたというからおどろきますね。

六 子供のお友だちの二

いざ子供走りありかん玉あられ

こんな句が芭蕉翁ばしやうの書いたものの中にあります。芭蕉翁は、「朝を思いまた夕を思うべし」と教えた人です。

七 子供のお友だちの三

鳴くねこに赤ン目をして手まりかな

柳からももんぐああと出る子かな

初瓜はつうりを引きとらまえて寝た子かな

露の玉つまんで見たるわらべかな

ゆで栗ぐりやあぐら上手な小さい子

人来たらかえるになれよ冷やし瓜うり

あんよあんよあんよや母を日傘持ひがさもち

秋風や壁のへまムシヨ入道にゆうどう

われと来て遊べや親のないすずめ

おらが世よやそこらの草ももちになる

初はつあわせ 拾はつあわせにくまれざかりに早くなれ

これは一茶いつさという俳諧師はいかいしの書いておいた句です。

一茶は少年のころからまま母の手に育てられ、ひがみというものも多かつた人のようですが、だんだんこの世の旅をして、いろいろな人にも交わってみるうちに、こんなに幼いものにあたたかい心を寄せるようになりました。なんと、ここに引いた句はいずれも好ましいものばかりではありませんか。この世に生まれて熱い思いをいだき、冷たくなつた人の心を暖めようとするところから、こんな句も生まれてきたのでしよう。昔にはこんな子供のお友だちもありました。

八 海の神

どれ、海の神さまのお話をしましょう。海を愛する神さまは、
どんなところに祭つてあると、皆さんもお考えでしょう。やはり、
それは海をよく見えるところに祭つてありますよ。がんじょうな
大きな岩の上に立つ見晴らしのいい山の上に。いかにも海の神さ
まのお住まいらしいところに。

そういう古いお住まいの一つが、山陰道さんいんどうの城崎温泉きのさきからそ
んなに遠くない瀬戸せとの日和山ひよりやまの上にもあります。瀬戸神社がそ
れです。そのあたりのことをすこしお話ししてみれば、山のふも
とから、木かげの多い坂道を登りますと、夏なぞ息がくるしいく
らいで、道ばたに青いにおいのする草までが暑い暑いと言つてる
ように見えますが、さて、その坂道を登りきつてごらん下さい。

すずしい海の風は皆さんのふところにまで吹き入りますよ。うつかりすると軽い夏ぼうしなぞは風に飛ばされるくらいのところですよ。そこまで行けばだれでも途中の暑苦しさを忘れれます。古い墓地が山の上にあります、そこから瀬戸神社への道もつづいてあります。墓地の近くには、古い言い伝えの残った一株の松の木もつて、遠く父の帝みかどをおしたい申ししたのも、その松の木かげからだと言われております。

青いあい色で美しい日本海のながめはこの山の上にひらけているのです。何百万貫からのいわしの漁のあつたことなぞをラジオでよく放送するのもこの海です。近くに後の島のちしま、かなたに鏡が崎かがみさき

も望まれて、いさましい漁師たちの船が青い潮に乗って行くのも、その島や崎みさきの間でしょう。瀬戸の漁師たちは毎朝このへんまで潮を見に来て、かならず瀬戸神社へもお参りし、海の幸さちをお祈りして行きます。海の幸さちとは古いことばのようですが、漁に獲物のあることを海の幸さちとも言いますし、海には海のさいわいがあることをもそう言うのです。おそらく、漁師たちは、どうか海の荒れませんように、どっさりおさかなのとれますように、いい海のみやげを船に積んでおうちに帰れますように、と言ってお祈りするのでしょう。

「おまえたちはそうしてわたしを見に来るのか、それとも海を見に来るのか。」

と云つて、海の神さまは漁師たちの耳にささやきますとか。おそらく、海の神さまはこの漁師たちを自分の子供のように思つてくださるでしょう。大きな海のような広い心でもつて、漁師たちの言うことをも聞いてくださるでしょう。そして、海の愛ということとを教えてください。

九 たけくらべの里

たけくらべの里とは近江おうみと美濃みのの国境くにさかいにありまして、両国の山々がたけくらべするように見えるところから、その名があります。この国境では、国と国とが寝ながらお話のできるくらいで

すから、両国の山々も背くらべをしては楽しむほど仲がいいところ
です。

そこへいたずらな雲が山々の上を通りかかりました。この雲は
近江と美濃の国境の空を通るたびに、山と山とが仲よく見えるの
で、持ち前のいたずらすることの好きなくせを出したくなりまし
た。ところが、雲だけでは、どんなに低くたれさがって行っても、
そうはふざけられません。そこで雨と霧を連れてきて、みんなで
遊ぼうとしたのです。さあ、雨はザアザア降る、霧は山のすその
ほうまで幕を張り回す。雲は雲でおもしろがって駆け回る。これ
には両国の山々もへいこうして、いたずらな雲が通りすぎるまで、
すっきりかくれひそんでしまいました。

この里は、山と山との仲がいいばかりではありません。両国の境は壁一重と言つてもいいくらいのところで、住んでいる人たちはまでが仲よしです。一方に両国屋という休み茶屋があり、一方には境^{さかいや}屋という宿屋もあります。美濃からはおむこさんにも行きますし、近江からはお嫁さんにも来ます。それほど仲よしの村^{むらぎ}と里^とへにわかには雨が来ました時は、おたがいにとりの国の家へ飛びこむものもあれば、からかさもすぼめて国^{くに}境^{さかい}を駆けて通るものもありました。

朝になつてみると、雨は晴れ、霧はおさまり、まるでそこいらは洗つたようになりました。気まぐれな雲のいたずらにかくれひそんでいた両国の山々は、またかたちをあらわして、いつものよ

うにむかいあいました。そこへ日輪が天を駆ける羽はぐるま車のなかから顔をお見せになりましたら、山と山とは負けず劣らずの色の濃さ、あざやかさで、ちようどあいでも流したように雨降りあげくの空にかがやきました。

「こんにちは。」

「はい、こんにちは。」

「どうも、きのうはひどい降りでした。」

「さよう、ひどい降りでした。」

美濃と近江の村里の人たちはこんなあいさつをして、おたがいに国の違いも忘れ、ことばのなまりの違いをも忘れながら、あいかわらず行ったり来たりしました。おそらく、山と山とのたけく

らべ、国と国との寝物語がまた続いて行ったことでしよう。

一〇 新しい建築の話

新しい建築ができて、屋根のかわらもふき終ったので、建築家がそこへ見回りに来ましたら、あつちでもこつちでもブツブツ言
いさわぐ声が高く丸太を組んだ足場の中から起っていました。

「何をお前さんたちはそんなにさわいでいるのかね。」
と建築家が尋ねました。すると、足場が言うには、

「まあ、聞いてください。わたしたちはもういらぬものだから、
取りくずせという人があるんです。そんなことを言われた日には、

だれだって腹が立ちます。もともとこんな建築のできたのも、わたしたちあつてのことではありませんか。それをいきなり取りくずせなんて、足場一同承知しません。」

この話を聞いて、建築家は笑い出しました。それからものやわらかな調子で、こう言いました。

「はて、お前さんたちまで建築のつもりでいるのかね。そんなに自分を忘れてしまつてはこまる。ようやく無事にこの建築もできて、お前さんたちの役目もこれですみました。長々みんなご苦労でした。お前さんたちは元の材木にかえってください。」

一一 二人の旅人の問答

甲 お前も旅か。

乙

そうです。わたしも旅です。

甲

お前はその若さで、どうしてわたしのような年よりのあとばかり追いかけてくるのか。

乙

さあ、わたしには師匠と頼む人もないものですから、あなたがしたものを自分でもさがしたいと思ひまして、それで、

こんなにあなたがたのあとばかり追いかけるようなしまつとなつたのです。

甲

お前も知恵がなさすぎる。わたしたちのあとについて来たところで、それがどうなるものか。ごらん、わたしはもう歩きすぎるくらい歩いてしまった。旅も卒業だと思ふころには、おいおい連れもなくなくなった。今は道を通る人もない。お前はここから引き返したら、よかろう。

乙

そこです。わたしはお別れを告げるつもりでいます。ごらんとおり、わたしはまだ旅人の卵で、経験というものも乏しいもの

ですから、あなたがたの深い足あとをたどって行ってみたら、どうかして自分でもさがしあてられるものがあるかと思つたのです。これがそもそもわたしのあやまりでした。いつのまにかわたしはひどく年よりくさい人間になっていました。

甲

お前がその年にも似合わないで、わたしたちの好きな茶色や灰色のような色の目に映ることをわたしはよく知っている。

乙

いえ、あなたがたの旅は、すっかりできあがった人の旅です。この世の末まで見つくしてきた人の旅です。そのあなたがたが、自分らと同じ年ごろにはどんなところを歩いておられたものか、

そこへわたしも気がつきました。

甲

それはいいところへ気がついた。わたしとしたところで、最初からこんな一すじにつながるものではなかった。ずいぶん手放しでさまよったものだ。まあ、この年まで旅をつづけてみると、夕日はかぎりなくいい、ただたそがれが近いと思うばかりだ。しかし、わたしはまだ行けるところまで行こうとしている。毎日のように歩いている。毎日のように進んでいる。

乙

ですから、あなたがたのあとが追いかけられるものではないと思います。わたしは、もっと自分の持つて生まれた若さを

取りもどさねばなりません。あなたがたが今つける旅の手帳をしまつておいて、若い時にあなたがたのつけておいた手帳をあけて見なければなりません。

甲

そうだ、そうだ、お前の言うとおりで。だれしも若いうちはしくじりなぞを恐れないで、思いきつてさまよつてみるくらいがいい。そう遠いところへばかり目をつけないで、自分の足もとをよく見るがいい。お前のさがそうと思うものは、きつと手近なところにかくれている。お前はお前で踏み出してみるがいい。

一一一 ほおずき

「かあさん。」と小娘こむすめがその母親のところへ告げに行きました。「このほおずきを鳴るようになしてください。」

ほおずきも、お盆ぼんの来るころにはまだ青くていましたが、いい色がつくようになりました。この娘が母親のところへ持つて行って見せたのは、実をつつんださやも赤く黄ばんだ色に染まり、その中からかわいらしい実が顔を出していました。母親はその実をとって、よくもみ、すっかり種を掘り出しましたら、丸い玉のようになんなんふくらんだやつが生まれてきました。母親はそれ自分の口に入れて、娘のよろこぶ顔を見ながら鳴らしてみせました。

「鳴るようになった、鳴るようになった。」

娘はうれしさのあまり、そこいらを踊って歩きました。音の出るものでありさえすれば、幼いものにはうれしかったのです。

その時、娘は母親からいい音のするおもちゃをいただいたばかりでなく、いっぱいに種をつまんだほおずきはかえって鳴らないで、穴をあけ、種を取り去り、中味をむなしくさえすれば、そんなによく鳴ることを教わりました。

『力餅』の後に

長々とわたしも話しつづけました。この本は作者の年若いころからいろいろな人に会って見たお話を中心にして、その前後に十と十二とのお話を添えてあります。それを八章に分け、つごう八十五のお話がこの本の中に入れてあります。

そう言つてはすこし自分流儀に過ぎるかもしれませんが、本というものはその中に書いてあることがすつかりわからなくても、わからないことはわからないなりにとどめて、読んでみていただくのがいいかと思われます。これを皆さんの着物のことにたとえてみますと、この八十五のお話の中には、すこしゆるやかに仕立てておいた物も入れてあります。今すぐそれが皆さんの背丈せたけに合わないまでも、すこしたつて、また取り出してみてくださいるなら、

きつと「うん、ちょうど、いい」と言ってくたさる時もありましよう。皆さんは、ずんずん大きくなるさかりですから。

この本の中には、第二章第十一話の『白い犬の話』のように古い言い伝えをもとにして書いたものもあり、第八章第十話の『新しい建築の話』のようにドイツの詩人ゲーテのことばから思いついて書いたものもあります。

峠のじいさんばあさんがおもちについて小屋に休んで行く人を待つように、わたしが皆さんにあげようと思う『ちからもち力餅』もできました。これが一冊の本になって、皆さんに開いて見ていただける日のくるのも、近いうちのことでしょう。

昭和十五年新秋の日

しず静の草屋くさやにて

- ① 『力餅』（研究社、昭和一五年一月）
- ② 『島崎藤村全集19卷』（筑摩書房、昭和三二年三月）

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第九卷」ほるぷ出版

1977（昭和52）年11月20日初刷発行

底本の親本：「島崎藤村全集19巻」筑摩書房

1957（昭和32）年3月

初出：「力餅」研究社

1940（昭和15）年11月

※表題は底本では、「力餅《ちからもち》」となっています。

※底本巻末の註は省略しました。

入力：菅野朋子

校正：杉浦鳥見

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

力餅

島崎藤村

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>